

# 研究史からみた 弥生時代の鉄器文化

## 鉄が果たした役割の実像

Iron Culture in the Yayoi Period from the Viewpoint of the History  
of Related Studies : Giving a True Picture of the Role of Iron

野島 永

NOJIMA Hisashi

はじめに

- ①研究史にみる鉄器文化 第1期
- ②研究史にみる鉄器文化 第2期
- ③研究史にみる鉄器文化 第3期
- ④新たな調査研究成果 第4期
- ⑤鉄器文化の実像をみる歴史認識の枠組み

おわりに

[論文要旨]

1930年代には言論統制が強まるなかでも、民族論を超克し、金石併用時代に鉄製農具（鉄刃農耕具）が階級発生の原動力となる余剰を作り出す農業生産に決定的な役割を演じたとされ始めた。戦後、弥生時代は共同体を代表する首長が余剰労働を利用して分業と交易を推進し、共同体への支配力を強めていく過程として認識されるようになった。後期には石庖丁など磨製石器類が消滅することが確実視され、これを鉄製農具が普及した実態を示すものとして解釈されていった。しかし、高度経済成長期の発掘調査を通して、鉄製農具が普及したのは弥生時代後期後葉の九州北半域に限定されていたことがわかってきた。稲作農耕の開始とともに鍛造鉄器が使用されたとする定説にも疑義が唱えられ、階級社会の発生を説明するために、農業生産を増大させる鉄製農具の生産と使用を想定する演繹論的立論は次第に衰退した。2000年前後には日本海沿岸域における大規模な発掘調査が相次ぎ、玉作りや高級木器生産に利用された鉄製工具の様相が明らかとなった。余剰労働を精巧な特殊工芸品の加工生産に投入し、それを元手にして長距離交易を主導する首長の姿がみえてきたといえる。また、考古学の国際化の進展とともに新たな歴史認識の枠組みとして新進化主義人類学など西欧人類学を援用した（初期）国家形成論が新たな展開をみせることとなった。鉄製農具使用による農業生産の増大よりも必需物資としての鉄・鉄器の流通管理の重要性が説かれた。しかし、帰納論的立場からの批判もあり、威信財の贈与連鎖によって首長間の不均衡な依存関係が作り出され、物資流通が活発化する経済基盤の成立に鉄・鉄器の流通が密接に関わっていたと考えられるようになってきた。上記の研究史は演繹論的立論、つまり階級社会や初期国家の形成論における鉄器文化の役割を、帰納論的立論に基づく鉄器文化論が検証する過程とみることもできるのである。

【キーワード】鉄器文化、唯物史観、新進化主義人類学、威信財

## はじめに

弥生時代に生まれた鉄器文化がどのような社会的役割を持っていたのか。戦後日本の考古学に影響を与えた啓蒙書や概説書、専門論考を通して、鉄器文化が弥生社会に果たした役割に関する言及を概観し、弥生時代社会において鉄器文化とはどのようなものとされ、どのような役割を担っていたと理解されていたのか、その説明の変遷についてみていく。その際、おおむね、<sup>(1)</sup>(1) 第2次世界大戦終結による戦前の政治体制の崩壊、(2) 高度経済成長期の発掘調査成果の蓄積、(3) 新たな調査研究成果が重なった2000年前後、をそれぞれ研究環境や研究視座の急速な変化点として捉え、その前後でもって都合4期に分け、弥生社会における鉄器文化の理解と解釈の規定点となった研究情勢の変化をみる。鍛冶遺構の調査や理化学分析によって明らかとなった事実とともに、新たな歴史観の導入によって変化する鉄器文化の実像を立論方法の差異によって再整理しつつ、より豊かなイメージを提示したい。

### ①……………研究史にみる鉄器文化 第1期

#### (1) 鉄器文化研究前史

明治末期から大正年間には、石器時代、つまり縄文式石器時代の担い手は、大和民族とは異なるコロボックル、のちにアイヌとなった先住民族であるとの見解が主唱されていた。当時の社会情勢や研究状況からすれば、貝塚から出土する縄文土器や打製石器と、古墳内部からみつかる刀剣や銅鏡、祝部式土器などの組み合わせとの間に何らかの関連を想定することは難しかった。日本列島における先史文化は大和民族の歴史とは直接は繋がらない特殊な世界として認識されていた。皇国史観が強制されると、記紀の記述からみた皇国の開闢が日本民族の歴史のはじまりであるとした論調に傾倒していった。そのため日本列島の先史・原始社会をいわゆる「同一民族」の社会の発展の軌跡として関連づけ、包括することはなかった。その後、歴史教科書批判を行った鳥居龍蔵も先史時代人を先住アイヌ民族と断定し、大陸・朝鮮半島から渡来した天孫民族と弥生式土器をもつ石器時代固有同胞民(国津神)の混成が大和民族の基本構成であるとする鳥居の見解が流布することとなった[鳥居1918]。これにより、隼人やアイヌなど先住民族の同化や漢民族の帰化を経て、列島固有民と大陸起源となる天孫族とが混成した大和民族は、太古から混成民族であるとの考えが一般化した。このため元来から混成民族であることを理由とし、帝国領土を広げる正当性を主張するようにもなっていく[喜田1918・1938]。

しかし、弥生式土器と共伴する遺物が徐々に判明し、弥生社会の実態がわかるにつれて、帝国主義的な世論を反映した論調だけでなく、新たな研究成果もみられるようになった。弥生式土器と祝部式土器の関連や弥生式土器と青銅器、漢代文物との共伴関係が明らかになると、弥生式土器の使用された中間期が漢魏代に併行する金石併用時代であり、中国史書にある倭人の記事から、大和民族の歴史として認識されるようになった[中山1917・1918、富岡1918他]。また、形質人類学

的研究によって石器時代人こそ混血を続けた原日本人であるという知見が知られるようになり〔清野 1925: 5-11, 清野・金関 1935〕, 記紀批判を重ねた津田左右吉の研究〔津田 1919・1924〕によって, 記紀開闢史の現実性が揺らいでいった〔内田 2008〕。がしかし, 鉄の問題ともなると, 古墳出土品の例示が一部にあるものの, 専ら記紀・続紀の記述からみた金属加工業の類推に終始するしかなかった〔鳥居 1925 他〕。

## (2) 史的唯物論の登場

昭和初期には, 考古学とは無縁の社会主義運動家, 渡部義通によって初めて日本列島の先史社会の生産技術と社会発展を通観した論考が発表された〔渡部 1931〕。渡部は「すでに滅び去った動物の種属の身体組織を認識するには, その遺骨の構造を知ることが重要であるが, それと同様に労働要具の遺物を知ることが, 既往における経済的社会形態を判断する上に重要な手がかりとなる。経済上の各時代を区別するものは, なにが作られるかということではなく, いかにして, いかなる労働要具を以て作られるか, ということである。(後略)」とする『資本論』の一節〔渡部他編 1974: 127-128〕によって, 生産用具の発達を基底に据えた先史・原始社会の研究をもくろみ, 日本列島の石器時代から金石併用時代を通した生産関係の発展についてはじめて描いて見せた。日本列島の石器時代を原始共産制社会と想定し, 石器時代の終わりから金石併用時代にかけて導入された稲作農耕技術に注目する。この稲作農耕技術は耕地開拓・灌漑技術を前提としており, 社会的生産力の発展におおいに寄与したと評価した。なかでも農業生産力のさらなる発展には鉄器の生産と使用による生産用具の革命が必然とされ, 鉄製利器使用による生産力の発展が支配と搾取を生み出す階級社会を形成していったことを指摘している。この論考には当時最新の考古学研究の成果が汲み取られてはいなかった。また, 石器時代民族を被支配階級としてクローズアップすることで, 体制批判を代弁させる文意もみられたが, 当時の考古学界に大きな思想上の影響をあたえたことは想像に難くない〔春成 2003a〕。直後には, 考古学者からも古墳時代前半期の石器の減少が鉄器の普及を示すといった利器の交替説が示されたり〔山内 1932〕, 稲作農耕を生産基盤とする計画経済のなかで, 弥生時代後期の鉄製農具の普及が原始的農業社会を鉄器時代へと向かわせたと説かれることにもなった〔森本 1933〕。言論と思想の統制がさらに厳しさを増すなかでも, 鉄製利器の導入による農業生産力の拡充と生産手段の独占が階級格差の拡大を引き起こし, 土地・農民の私有化を経て階級社会へと向かうといった唯物史観からの説明がみられるようになった〔禰津 1935〕。森本とともに弥生文化研究をリードしてきた小林行雄は, 弥生式文化は磨製石器文化から青銅器文化, さらに鉄器文化の波が追いかぶさる姿相をもつとした。それはいわば伝統的な磨製石器文化の否定的な発展過程であり, 金属器文化(鉄器文化)に置換される目的を担っていたとする。石庖丁や石器の減少から弥生時代後期の鉄器普及を推しはかり, 採鉱から精錬までを取り仕切る専業工人の存在とその工人集団の維持を行いうる分業化の進んだ社会機構の将来までをも推察しており〔小林 1938〕, 具体的な社会描写からすれば, 終戦以前思想・言論統制下における弥生文化研究の到達点を示すものといってよい。

## ②……………研究史にみる鉄器文化 第2期

### (1) 生産力と鉄器

第2次世界大戦後は、言論統制の呪縛から解き放たれ、皇国史観による歴史叙述ではなく、「科学」としての考古学による「日本列島の歴史認識」、科学的視点からみた「日本民族」の歴史の再構築が急務とされた時期であった。日本考古学協会の設立ののち、軍需工場建設の際に発見されていた静岡県登呂遺跡の発掘調査が行われ、弥生集落と水稻農耕の発展を統一的に把握することが大きな目標となっていく。弥生時代前期から中期の土器様式の総合的な把握にも重要な成果をもたらされることとなった。

1943年、杉原荘介は唐古遺跡の調査成果から、弥生時代がその当初から精巧な木器加工のための鉄製工具を主体とする鉄器時代であることを明言した〔杉原1943、石川2008〕。1950年代には、日本における鉄器文化の発展を生産力と関連づけて説明する見解が中心となっていく。戦前、石器の消長から金属器（鉄器）の普及を想定した小林行雄はその後も弥生時代後期を「石器使用の廃絶と鉄器使用の普遍化」の時期と捉えつづけた。転換期としての後期は「弥生時代の共同体の指導者が古墳時代の大型前方後円墳に葬られる支配者に転換した」段階とし、日本列島における階級の発生について言及している〔小林1952〕。小林は弥生時代における農耕開始後の階級発生は必然ではなく、唯物史観からみた単なる公式的見解にすぎないことを自認しつつも、鉄器使用の普遍化を鉄製の鍬鋤刃先の採用と捉え、それが農地の開墾を容易にし、生産力の急激な増大に至らしめ、巨大な古墳の築造をも可能にしたとする。さらには日本列島における階級社会の出現を急速に推し進める原因ともなったと推断したのである。戦後、さらに影響力が強くなっていた小林の言説によって、石器生産の衰退、つまり出土石器の激減と農耕の発展は鉄製農具、なかでも鉄刃農耕具（耕起具としての鉄製鍬・鋤先）の導入による結果であるという図式が成り立っていく。近藤義郎や岡本明郎らもさらに一歩進めて、弥生時代後期に出現する鉄刃農耕具が人工灌漑を急速に進展させ、農業経営規模の拡大と生産力の発展をもたらしたとした〔近藤・岡本1957〕。

田辺昭三も弥生時代の生産力の発展が原始共同体から最初の階級社会への移行を促したとして、生産用具を作るための道具である鉄製工具の出現と普及に注目し、それを経済発展の指標とした〔田辺1956〕。田辺は弥生時代中期以降の石器消滅を鉄器普遍化の結果による現象として捉え、その消滅期の「ずれ」を生産力の地域的不均等による原始共同体制の崩壊期の様相を示しているとし、やはり新たな階級支配の生成過程のなかで鉄器の普及を理解していこうとした。

一方で杉原荘介は引き続き、熊本県斎藤山遺跡貝塚出土鉄斧の理化学分析から、弥生時代前期にはすでに鍛造鉄器が出現していると推測していた。小林らとは異なり、以前から鉄製工具が木製農具などの生産用具の生産に大きく寄与したことを重ねて指摘し、持論を強調した〔杉原1955〕。その後も出土資料から鉄器の普及がおもに工具に浸透していることを示唆しており、柄と柄孔加工による組み合わせ道具の製作が木製農具などを中心とした木器加工技術に革命的な発展をもたらしたともしている〔杉原1956・1960〕。

これらの論考は弥生時代の鉄器が鉄刃農耕具として直接的に農業経営規模の維持・拡大の礎となりえたのか、あるいは木製農具などを生産するために利用されたのかは別としても、結果としての「生産力の発展」が土地の占有や家父長制度の発達、地縁的結合を基盤とした社会、私有民や土地などの財産所有、世襲といった階級社会の特徴を強めていく要因として語られた点ではおおむね共通するものといってよい。

## (2) 農業生産力と首長権力

鉄刃を装着した農耕具（耕起具）が少数しかなければ、水田開墾や灌漑施設の整備などを実現する協業労働の効率化にそれほどの効果はなかろう。鉄刃の大量生産を行ってより多くの労働者に行き渡らなければ、農業生産力の飛躍的な発展を遂げることはおよそ期待できない。まずは、より多くの共同体構成員による鉄刃の所有と使用が前提となるわけである。農業生産力の発展が実現するには、共同体代表者としての首長が鉄器を管理・独占し、その所有権を主張しえたとは想定できない。

このため、田辺昭三は生産の協同と平等分配を機軸とした原始共同体の諸関係を共同体規制として継承しつつ、農業生産力の発展が実現したとする。首長層の支配権の伸長とは異なる脈絡で農業生産力の進展が描かれていることがわかる〔田辺 1961a・b〕。鉄器の普及が生産力の飛躍的発展を引き起こし、階級社会発生のための物理的基礎をなしたとするものの、共同体生産力の発展と首長の支配権伸長のロジックの間に乖離がみられた。

1966年に河出書房新社から出版された『日本の考古学』Ⅲ、弥生時代編は、戦前から戦後にかけての弥生時代研究の動向とそれまでの研究成果が集大成されていたといえる。個別遺物自体の問題だけでなく、それら考古資料と他の社会事象との関連をも見据えた論調が強くなっていた〔和島 1966〕。同書のなかで近藤義郎は水稻耕作を計画経済の基礎として位置づけ、不均等性を保ちつつも不断の拡大再生産が単位集団の経済的自立性を促していったとする〔近藤 1966〕。また、水稻耕作の拡大再生産に孕んだ自己矛盾を解決するために、集団統制・社会規制に関わる首長はその権限をさらに強くしていったとし、人口・生産力の拡大とともに首長主導の交易と分業が展開していったことをより自然な経緯として捉えている。こののちも近藤は農耕開始による土地生産性の増大が人口の増加を引き起こし、それにもなって開田・水利・田植え・収穫などといった協業労働の比重が増し、共同体規制が厳しくなると、その余剰を一部交易に振り向ける共同体代表としての首長の姿を想定している〔近藤 1982b〕。共同体規制の強化と首長権力の伸長といった二律背反的な矛盾について、より整合的な解釈を行ったといえる。多くの鉄資源を韓半島に依存していた段階では、北部九州の諸集団との持続的かつ広範な交換活動によって間接的に鉄・鉄器が入手されていたことを想定しており、物資交換に供するための交換財の生産活動によって分業が促進されたとし、分業による生産体制の確立は共同体規制の持続的な発展の下におかれていたものの、外部物資との交換における主導権は共同体を代表とする首長にもたらされ、首長権限を強化する方向に働いたと考えた〔近藤 1982b〕<sup>(2)</sup>。

都出比呂志も農業生産経済の確立・発展のなかで、中期末葉以降の開墾具（耕起具）や収穫具の鉄器化と後期の普及を想定しており、近藤同様、交易と社会分業において共同体を代表する首長が重要な役目を担っていたことを指摘している〔都出 1970〕。佐原真も食糧の計画経済が基幹となる

農耕社会の発展と手工業專業工人の存在の間の相関性を説き、弥生文化が階級社会の基礎をなしたとしている〔佐原 1975〕。小林同様に石器の消滅が鉄器の普及を示すものとし、近藤の主張に従って自給的な鉄生産の発生を想定した。

鉄器の導入によって、いわゆる生産力のなかでも農業生産力による余剰の創出、それに必然的にもなってくる交易や分業生産の進展、專業工人の成立が結果的には社会の変容を余儀なくしていく方向に向かうという見解が大きな潮流となっていた。農業生産力増進のために使用された多量の鉄刃農耕具の生産のためには素材原料となる鉄をどのように入手していたのかといった問題が未解決であったことから、地域ごとに小規模な鉄生産を想定する意見と韓半島南部からの輸入を想定する意見に分かれ、交易や専門工人の存在の様態にニュアンスの差異を引き起こしていた。

がしかしその後、弥生時代の発掘調査成果の充実とともに精緻な個別遺物研究が進んでいったために、鉄器文化と農業生産力の進展を直接的に結び付ける論調はやや陳腐化し、次第に低減していったようである。弥生墳墓の調査事例が増加したことから、首長権力の伸長に関しては、墳墓の発達から具体的な説明がなされる場合が多くなっていった。

### (3) 最古の鉄器の出現

1960年代には熊本県斎藤山遺跡出土鉄斧が板付Ⅰ式にとまなうことが広く知られるようになり〔乙益 1961・鏡山・乙益 1969〕、杉原荘介〔杉原 1960・1961〕や近藤義郎〔近藤 1960・1962〕らも弥生時代当初から鉄器が存在していたことを確認した。このうち、斎藤山遺跡の鉄斧は弥生社会の最初期から農耕文化体系に鉄器文化が付随していた、あるいは中国大陆から韓半島への金属器文化のインパクトが農耕社会の成立の要因となったとする考えを支える根拠とも象徴ともなっていく。

しかし、斎藤山遺跡出土鉄斧は顕微鏡写真検査〔乙益 1961: 131〕、あるいはスペクトル分析〔川越 1980: 324〕から、その炭素含有量が0.3%という、鍛造鉄器としてもかなり低い値が推定された。戦国時代後期の鑄造鉄斧の可能性が当初から疑われており〔潮見 1970, 長谷川 1970〕、のちには退火脱炭処理された鉄器表層の炭素量が判定されたものと推測する意見も強まった〔川越 1980〕。その後も、戦国系鑄造鉄器片などでも理化学分析によってかなり低い炭素量の含有が想定されたため、弥生時代早・前期の鉄器は山口県山の神遺跡の袋状土坑出土鋤先以外、清浄な鋼素材の鍛造鉄器と判断された〔佐々木 1993 他〕。橋口達也も前期から中期前葉の鉄器は舶載鑄造鉄斧以外すべて鍛造品だとした〔橋口 1974〕こととも相まって、弥生時代前半期の鉄器については、長らく鍛造か鑄造かといった議論が引き続いた。

その後、福岡県曲り田遺跡 16号住居跡出土の板状鉄片が夜臼期に遡る可能性が指摘された〔橋口編 1984〕。この鉄片も表面黒錆部分の顕微鏡組織検査によって清浄な鋼素材を使った鍛造鉄であると判定されたことから、弥生時代初頭の鍛造鉄器文化の存在はますます信憑性を増すものとなった〔佐々木・村田・伊藤 1984〕。鍛造鉄器の出現が農耕開始前後<sup>(3)</sup>にまで遡る可能性がきわめて高くなったと周知され、それが定見となっていた〔高倉 1985, 甘粕 1986, 潮見 1986〕。

このように初期鉄器が鍛造鉄器文化であることが支持されてきたことから、依然として流入開始の契機としては楽浪四郡設置が漠然と想定されていたようである。弥生時代前期が紀元前2世紀末頃となることを示唆する意見さえみられた〔大場 1969〕。韓半島の初期鉄器を分析した西谷正

は鄭白雲の意見に同調して楽浪四郡設置以前に戦国鑄造鉄器文化の流入を想定してはいたが〔西谷 1970〕、鑄造鉄器文化自体の故地を韓半島北部の限定された範囲の中で考えざるをえない状況であったことや、日本列島の初期鉄器文化が中国江南地域、とくに戦国楚の鍛造鉄器文化を源流とするとした見解〔橋口 1974, 川越 1979・1980〕が有力となってきたため、この段階においては中国東北部の鉄器文化との関連から実年代を考慮する意見は少なかつた<sup>(4)</sup>。このため、弥生時代前期が紀元前 2 世紀にあたることにそれほどの疑義はなかつたように思える。

結局、弥生時代の初期鉄器は理化学分析からも鍛造鉄器文化の所産であるとされ、斎藤山遺跡の鉄斧などが戦国系の鑄造農具であると明言する意見はかなりののちになった。初期鉄器には鍛造品と見間違われていた鑄造鉄斧破片が含まれていたために、理化学分析研究者を含めて事態はより一層複雑化した。このため、この種の鑄造鉄斧の破片がかなり出回っていたことに気づくまでにはさらに時間がかかる結果となってしまった。

#### (4) 鉄生産の可能性

弥生時代における鉄生産の存否についての定説は今もまだない。弥生時代の鉄器の素材原料は一貫して韓半島から輸入していたとする考え方と、弥生時代の日本列島において倭人が鉄資源を開発したとする考え方がある。後者にはおもに鉄鉱石の低温固体還元による低品位な海綿状の小鉄塊を生産するとした自生製鉄説〔和島 1966, 近藤 1966〕と、大陸あるいは韓半島からの製鉄技術の移入によって日本列島ではやくに鉄生産が開始されたとする技術移転説があった〔潮見 1970〕。

韓半島から鉄素材がもたらされたと考える立場には、森浩一・岡崎敬・村上英之助らがいた。森は韓半島南部の古墳にみられる鉄鋌が日本列島出土のものに類似することから、それ以前も大量の鉄素材を輸入していたと考えた〔森 1955〕。のちにも、たとえ一部鉄製錬に成功していたとしても、鉄素材の舶載に依存する段階から脱却するには程遠い状況であったとしている〔森・炭田 1974〕。岡崎らも原の辻・唐神遺跡の鉄器に関する論考のなかで、すでに弥生時代鉄製錬説に対しては否定的な立場をとっていた〔岡崎 1956〕。『魏志』東夷伝弁辰条など中国史書の記事から、弁辰が楽浪・帯方二郡に供給した鉄は、地金のようなものであったとし、両遺跡から出土した板状や棒状の鉄材を韓半島から輸入した地金と考え、日本列島においては鍛冶加工のみを行っていたと想定した。西谷も韓半島出土鉄器の分析から、岡崎の意見に同調した〔西谷 1970〕。また、村上英之助は石川恒太郎が銅鉄の精錬遺跡〔石川 1959〕としていたものを炉形・送風装置・鉍滓について、それぞれの疑問点からこれを否定し〔村上 1962〕、弥生時代における鉄生産に否定的な立場をとった。村上らは日本列島西部における出土鉄器の炭素量が比較的高いことから、倭人が楽浪郡から鑄造起源の故鉄を持ちかえり、再熔融あるいは精錬を行って鑄造鉄器や鋼製品を再生産したと推測した〔村上 1964〕。貨幣のように利用された鉄の記事と、韓半島南部出土鉄器との類似性から鉄素材輸入説が形成されたわけだが、村上らは弥生時代の初期鉄器が鑄造起源であること、またそれが舶載されたことを早くに指摘しており、異なる輸入説といえる。

一方で、鉄刃農耕具の普及から農業生産の発展と階級社会の出現を説く岡本明郎や近藤義郎らは、日本列島内での鉄生産を想定した〔岡本 1961, 近藤 1955・1962〕。弥生時代後期、東日本や山間僻地においても石器が駆逐されて鉄器が導入されたのは、列島各地で小規模な鉄生産が開始された

ためであるとした。山間僻地にもみられるすべての鉄器・鉄片を一元的に流通させ、かつ再配分する機構が存在しない限り、各地における鉄製錬も考えざるをえないという論旨であった。ただし、この小規模鉄生産の想定にも若干の異同があり、和島誠一は中国山地花崗岩地帯での砂鉄製錬〔和島1966〕を、近藤は低品位鉄鉱石の加熱処理によって小鉄塊を還元させていた可能性を説いた〔近藤1966〕。当時はこのような弥生時代自生製鉄説が日本考古学界に受け入れられていたようである〔川越1993b:263〕。熊本県下前原遺跡第6号竪穴住居跡出土鉄滓が低チタン砂鉄起源の製錬滓であると判定された〔長谷川・和島1967, 湊・佐々木1968〕こともあり、弥生時代における自生製鉄説はほぼ決定的となった〔川越1968b〕。しかし、依然として製鉄遺構の痕跡をみいだすことができなかったことから、製錬・精錬工程が未分化でプリミティブな製錬方法であったために、それほどの被熱痕跡を残さなかったのではないかとする意見も多くなった。のちにも近藤は岡山県門前池遺跡出土の褐鉄鉱塊は中国地方山間部などで鉄素材の生産が行われていた証拠であるとし、弥生時代鉄器は低品位鉄鉱石による小規模生産によって自給されたものと唱導した。石器よりも鉄器の出土数が少ないのは、酸性土壌によって消失してしまうだけでなく、鍛冶によって再利用されていくことを想定した〔近藤1982a〕。

また潮見浩や川越哲志らのように、韓半島における鉄生産技術が日本列島にまで波及したと考える鉄・鉄器文化研究者の意見もあった。川越は消耗品となる鉄鏃の出現に鉄生産が行われはじめた事態を想定し、関東や東北地方において鉄鏃が普及する中期後葉までには各地で鉄生産が開始すると予想した〔川越1968a〕。潮見は出土資料からみた川越の意見を尊重しつつ、さらに古代東アジアの鉄文化のなかでは、鉄器生産の初現は鉄生産と不可分なものであり、一つの文化体系として把握せねばならないことを強調した。よって、九州北部の鉄器生産開始からそれほど下らない時期にすでに鉄生産が開始されたことを想定すべきであるとした〔潮見1970・1982〕。

上述したように、1960年代から1970年代には、弥生時代に製鉄が存在したと考える立場にも2通りあった。その一つ、未熟な小規模鉄生産が自生したとする考え方は史的唯物論による演繹的な推論によるものであり、多量の鉄刃農耕具の製作に見合った鉄生産量が前提として必要となることからといえる。一方で、韓半島から製鉄技術が導入されたとする考え方があった。弥生時代中期後葉から後期の消耗品ともなる鉄鏃の出土数からみた帰納的な結論としてその存在を仮定したのである。相対する立論過程をもつものの、いずれも弥生時代に九州から関東まで、あるいは山間僻地まで鉄素材や鉄器を流通させるような広範流通を管轄する中心的な政治機構が未成立であることを根拠としていた。遠隔地まで金属が流通する現象についてそのような政治機構の存在が前提となっていたことに立論の限界があったともいえる。

このようななか、出土鉄滓などの金属学的分析を多く手がけた大澤正己は、鉄滓に含まれる夾雑介在物の鉱物組成などの分析によって製錬滓と鍛冶滓の区別に成功する。佐々木らが製錬滓と判定した下前原遺跡出土鉄滓を鍛冶滓として否定し、古墳出土の鉄滓のなかに製錬滓が含まれはじめるのは古墳時代後期後半以降とした。つまり、鉄生産もそれ以前には遡らないと判断したのである〔大澤1977〕。その後、福岡県潤崎遺跡出土鉄滓を古墳時代中期後半の砂鉄製錬による製錬滓と認定し、木炭窯が須恵器窯業技術と共通するという間接的証拠から、古墳時代中期中葉ごろから九州北部などの一部で鉄製錬が開始されたと修正した〔大澤1983〕。潤崎遺跡出土鉄滓についてはその分析に



懐疑的な意見が投げかけられたが、鉄滓の理化学分析が進むなかで、吉備周辺地域における古墳時代後期の製鉄遺跡の発掘調査も行われ、1980年代後半には、大澤の見解は妥当なものとして受け入れられた。と同時に弥生時代に原始的な製鉄技術が普及したとする考え方は次第に陰りをみせていった。<sup>(5)</sup>

## (5) 鉄器生産の諸段階

先述したように、岡崎敬が長崎県壱岐市原の辻・唐神遺跡で出土した弥生時代鉄器を農耕具（鋤先・鋤先・鎌）、木工具（鉦・鉋）、狩猟漁撈具（武器）（刀子・鏃・鈹・釣針）、その他（鉄塊片）に分類した〔岡崎 1956〕。岡崎は弥生時代後半期に普及した鍛造品と同じ形式のものが古墳に副葬されることから、基礎的な生産技術が弥生時代から受け継がれ、支配階級が鉄を占有したものとし、中山同様、古墳時代の鉄器を前代の生産技術の継承として理解した。

また、都出比呂志が農具鉄器化の画期を弥生時代中期末葉の鉄製打鋤（鋤先）と直刃の鉄鎌に求め、開墾と収穫に鉄器が投入されて可耕地の拡大が起こったとした〔都出 1967〕。史的唯物論の枠組みから鉄刃農耕具そのものを研究対象として扱ったもので、日本考古学においては先駆的な鉄器研究となった。

その後、岡本明郎や川越哲志によって、実際に出土した鉄器遺物から弥生時代における鉄生産を段階的に把握しようとする提言が行なわれた。岡本は鉄器使用から鉄生産までの各段階を想定して以下のように設定を行った〔岡本 1958・1961〕

- 1) 小さな鉋などの鋭利な刃物のみが鉄器として存在する段階。
- 2) 工具一般が鉄器となる段階。
- 3) 農具など耐久的な道具が鉄器となる段階。
- 4) 鏃のような消耗品までもが鉄器となる段階。

しかし、岡本の理念的な想定は弥生時代に出土する鉄器の実際の様相とは異なっていたため、藤田等と川越哲志は出土鉄器を集成し、農工具の発展段階を再度設定しなおした〔藤田・川越 1970〕。

- 1) 石製工具（大陸系磨製石斧群）＋木製農具
- 2) 鉄製工具＋木製農具
- 3) 鉄製工具＋鉄刃農耕具＋木製農具

この結果、九州北部以東での農具の鉄器化は古墳時代前期にまで遅れる場合があることがすでに指摘された。こののち、近藤や向井義郎らによって設立され、潮見らに引き継がれた、たたら研究会に参集した考古学・金属学・冶金学・経済学など様々な立場の研究者が弥生時代の新出鉄器に関するあらたな研究を行っていくことになる。

橋口達也は福岡県吉ヶ浦遺跡出土鉄器を紹介し、前期初頭から中期前半にかけては舶載品の鉄製工具が主体をなすが、前期末葉から鉋や刀子などの小型鉄器が製作され、中期前葉から斧などの木工具が日本列島内で製作され始めたとした。さらに中期中葉には武器の生産が行なわれ、やや遅れて中期後葉に鎌、後期初頭に鋤先などの鉄刃農耕具・土掘り具の製作が開始されるとした〔橋口 1974〕。のちに原の辻上層式が後期後半になることが指摘されたことから、農具鉄器化、鉄刃農耕具の製作は弥生時代後期の後半段階にまで遅れると自説を修正した〔橋口 1983〕。

川越は板状鉄器を集成し、それが大陸系磨製石器群にとって代わる鉄製工具、板状の鉄斧であることを明らかにした〔川越 1974〕。これまで弥生時代の鉄器文化についてはおもに九州北部にのみ目が向けられていたのに対して、関東から中国・四国地方にみられる板状鉄器に注目し、それが中期後半にほぼ齊一的に用いられたとした。さらに川越はおもに鉄製農工具の発展段階と普及について、下記の4段階を想定した。

- 1) 弥生時代前期～中期 多数の大陸系磨製石斧群(木工具) + 石製収穫具(石庖丁・石鎌) + 少数の鉄製工具
- 2) 弥生時代中期後半～後期(九州北部では前期末から) 磨製石斧群と国産鉄製工具の併用 + 木製農具 + 石製・鉄製収穫具(鎌)
- 3) 弥生時代後期 鉄製工具 + 木製農具 + 石製・鉄製収穫具
- 4) 古墳時代前期以降 鉄製工具 + 鉄刃木製農具 + 鉄製収穫具

川越の論考はおもに鉄製農工具の変遷を探るものであり、鉄器形態の変化が、鍛冶技術の伸展に起因することを示唆していた〔川越 1974〕。小田富士雄も弥生時代の鉋に吉ヶ浦型と立岩型があることを指摘した。吉ヶ浦型は中期から後前半まで存続するが古墳時代に継承されないもののであるのに対して、立岩型は中期後半から出現し、古墳時代に継承されるものとしている〔小田 1977〕。

このように1970年代後半には、所属時期の明らかな鉄器の増加にともなって、徐々に鉄器の形態変化による編年的な考察がないうようになっていった。しかし、この鉄器の型式変化や組成から弥生時代の鉄器がどのような役割をもって社会の発展に寄与していたのかといった問題に触れる発言は少なく、鉄刃農耕具の型式変化は生産体制の発展に、また、鉄製工具のそれは鍛冶技術の伸展に起因するとした意見が引き続くこととなった。

## ⑤……………研究史にみる鉄器文化 第3期

### (1) 弥生時代鉄器の地域性の抽出

高度経済成長の最終成熟期となった1980年代以降、膨大な発掘調査事例から鉄器出土量が急増した。第3期には九州だけでなく関東・中部地方に至るまで、弥生時代の鉄器出土例が多数蓄積された。松井和幸は九州・近畿、さらには関東・中部地方などの集落跡出土の石器と鉄器の共伴事例を検討したなかで、弥生時代大陸系磨製石器群の消滅と鉄器の普及について論じた〔松井 1982〕。農具の鉄器化が農業生産力にはそれほど直結したものではなく、その過大評価は危険であるとした。また川越も九州北部における弥生時代後期の鉄刃農耕具の所有形態について論じ、住居跡からは普遍的に遺棄された鉄刃農耕具が認められることから、農具の所有からみれば階級対立の顕現化はかなり緩慢であったとした〔川越 1977〕。高倉洋彰も第16回埋蔵文化財研究集会の成果〔埋蔵文化財研究会事務局編 1984〕を援用し、東アジアの鉄器文化のなかでの九州北部の各種鉄器について再整理した〔高倉 1985〕。原の辻上層式土器群の検討により、岡崎が紹介した原の辻・唐神両遺跡出土鉄器を後期中葉から後葉のものとし、鉄刃農耕具の出現と普及は弥生時代後期後葉から終末の時期にまで降ることを強調し、弥生鉄器文化における鉄刃農耕具の過大評価を戒めた〔高倉 1986〕。そ

の後の鉄刃農耕具の出土状況からみても、今まで考えられてきたよりもかなり遅くならないと鉄刃農耕具は普及しないと考えられるようになり、鉄刃農耕具の投入による農業生産基盤の拡大から階級社会の成立を描くという理念的歴史像が存続する余地はほぼなくなった。

1990年代には、西日本各地の大規模集落の調査事例が蓄積され、鉄器組成および各種鉄器の型式からみた地域性も理解されるようになってきた。村上恭通は九州中部、阿蘇山麓周辺の弥生集落を中心とした鉄器文化の地域性について言及した〔村上1992〕。九州北部では、鉄器生産が石器生産と併存しながらもその比重を増していったとみられるのに対して、九州中部では磨製石鏃の生産を除いて他の石器生産の基盤が脆弱であったがゆえに生産工具や農具の鉄器化が急速に進んでいったことを推測した。この地域では韓半島に出回っていた単合範梯形鑄造鉄斧や大形袋状鉄斧がみられない状況から、阿蘇山麓に賦存する褐鉄鉱原料を製錬し、その素材から鉄器加工を行っていた可能性を指摘した。

中国地方ではとくに鉈と鉄鏃の出土例が蓄積されてきたため、筆者も九州および中国地方における鉈と鉄鏃の各形態の地域別比率に格差が認められることを指摘し、それらが独自の変化を遂げていることから、弥生時代後期においては、鉈や鉄鏃の製作が各地域で行なわれていたと想定した〔野島1993〕。

## (2) 鍛冶遺構と金属学的分析

1980年代から1990年代には、弥生時代の鍛冶遺構の調査事例も増加し、注目される調査成果が徐々に蓄積された。村上による鍛冶遺構（鍛冶工房）の集成によって、必要最低限度の簡単な堀込みの炉を造り、鉄製鑿・石鎚によって鍛冶が行われていたことが判明した〔村上1994b〕。これにより弥生時代の鍛冶遺構からは、三角形板状・方形板状・棒状などの小鉄片が多量に出土することが知られるようになったが、村上はこれらの小鉄片が鉄器加工の最終工程で、鉄板などを断ち切った際に派生した端切れであるとした〔村上1994b〕。その後も、西日本で多くの調査事例が積み重ねられ、端切れ鉄片が多量に出土する鍛冶遺構〔村上1995〕だけでなく、地上式の炉壁をもつ鍛冶炉を構築する特殊な鍛冶遺構なども紹介された〔村上2002〕。村上は弥生時代の堀込み炉をⅠ類（掘形を大きくとり、防湿施設を備える）、Ⅱ類（掘形のみでその内壁がわずかに焼けている）、Ⅲ類（掘形をほとんど持たず床面をそのまま炉とする）に分類したが〔村上1998：84-86〕、その後、Ⅳ類（掘込みのない平地式の簡易な炉）を追加した〔村上2000：64，村上2007：24-26〕。この時期、村上は新たな鉄器生産技術論を展開していったといえる。

近年では、中国地方や近畿地方あるいはそれ以東の地域では、掘込みのない平地式の簡易なⅣ類鍛冶炉がかなり普及していたことがわかってきた。この種の鍛冶炉では送風のために固定した羽口を使用した痕跡はない。住居床面に直接炭を積むもので、たとえ送風によって炭積み内の熱量を上げることができても保湿機能が低いことから、本格的な鍛冶加工が行えるような高温を維持することはできなかつたとみられる。排出滓も多量には出土しないことから「沸かし」や「下げ」といった「火造り」を行うために必要な熱処理技術が習得されていたとはいえない。Ⅳ類鍛冶炉での鉄器製作は鉄板を加熱後、鍛打して鑿切りや曲げ作業を行い、鉄鏃や鉈などの小型鉄器が製作されていた程度のもと考えられており、その結果、端切れ鉄片が多量に出土するとされた。鍛冶によって

廃材となった鉄片が再利用されたために鉄・鉄器が遺存しないとする意見を否定する調査研究といえよう。弥生時代後期には鑄造起源の鉄素材の銑卸しや炭素量の調整、鍛接による大型鉄素材の再生、あるいは鍛冶による鉄器リサイクルが行われていたとするこれまでの想定は、西日本全体にあてはまるものではなくなった。九州北部と四国西部、山陰地域の一部にその可能性が指摘できる鍛冶遺構や鍛冶関連資料があるものの、瀬戸内から畿内地域、それ以東の地域ではかなり稚拙な熱処理技術を想定せざるをえなくなったのである。このような鍛冶技術の低迷からすれば、利器としての鉄器そのものの実効力にも一定の限度があることから、鉄器の普及や流通に関わる過度な評価を戒める指摘もなされ [村上 2000 : 65]、弥生時代の鉄器文化が国家形成にどこまで寄与したのか、という鉄器文化の実像に関わる根本的な疑問が投げかけられることにもなった。

弥生時代の鉄器の理化学分析を担い続けた大澤正己も鍛冶遺構からの出土遺物の分析を手掛けるようになっていた。古墳時代あるいは古代の鍛冶関連遺物を幅広く扱ってきた大澤も弥生時代の鍛冶遺構には土製羽口が存在しないことや、重量のある椀形滓の生成がみられないことを重視した。このことから、高温維持をともなう「沸かし」や「下げ」などの本格的な鍛冶作業は行なわれていなかったと判断するにいたった [大澤 1997・2000 他]。長年、鍛冶遺構出土鉄材の金属組織分析も継続しており、弥生時代中期までは可鍛鑄鉄や鑄鉄脱炭鋼片、後期には炒鋼素材が流入し、のちには固体還元による塊錬鉄素材に変化するとした [大澤 1997・2000・2004 他]。弥生時代に持ち込まれた鉄原料が中国東北部の鑄鉄起源の鉄素材や高炭素鋼から韓半島南部産と目される塊錬鉄起源の低炭素鋼へと移り変わっていくことが想定されたといっておくべきであろう。

### (3) 石器生産の衰退と鉄器普及

九州北部における鉄刃農具の普及が弥生時代後期後半に遅れることが明らかになったことから、近畿中枢部における石器消滅が弥生時代後期の鉄刃農具の普及を示すものとした論旨が通用しなくなった1990年代でも、弥生時代後期はのちの前方後円墳成立のための社会変化の起点であり、ターニング・ポイントであり続けた。

禰宜田佳男は弥生時代中期後半に石材を中心とした近畿中枢部の集団間の経済システムが鉄器の流通・普及によって崩壊し、後期初頭には完全な鉄器化が図られ、石器が激減したとした [禰宜田 1992・1998]。松木武彦もまた禰宜田の所説を援用し、近畿地方でも後期には農具が鉄器化していたと考え、外部依存の必需物資であった鉄と鉄器生産技術が社会の階層化や流通構造の変化に大きく寄与したとする。韓半島など外部から流入する鉄・鉄器を再分配するシステムの出現によって、石材など地元経済圏で生産された物資の交換を行う従来の経済システムが空疎化し、その過程で再編成された地域集団間の階層化が著しくなったとした [松木 1996・1998]。

弥生時代後期の石器生産の衰退を鉄製農具の普及、農業生産発展の状況証拠とみるのではなく、外部依存となる重要物資の掌握やその再分配のための広域流通構造の成長・発展の結果と想定したわけである。そして、首長権力が発生するための経済基盤（ポリティカル・エコノミー）は農業生産を基盤としつつも、対外的に得られた重要物資の管理とその再分配にあることを主張した (図1)。すでに2世紀後葉の「倭国乱」を示す考古学的事象は鉄の大型化などにあるのではなく、韓半島南部地域の鉄資源や鉄器の入手をめぐる九州北部と近畿中枢部の間の抗争、つまり覇権

争いであったとする論説が定着していた [白石 1993]。このような抗争を経て、鉄など必需物資の流通機構としての初期畿内政権の成立を想定したわけである。松木の所説は国家形成論の新しい動き、つまり、広域にわたる物資流通機構の掌握が初期国家成立に重要な役割を果たしたと考える都出比呂志 [1991・1992] や、各地の首長が非自給的物資の分業体制を維持しつつ、首長同士のネットワークを作り出していったとする広瀬和雄 [広瀬 1992] に同調するものであり、かつ首長制社会においては物資の生産と再分配を行う中心化した政治構造が発達するといった新進化主義人類学の社会進化論の一部が適用されていたことがわかる。依って立つ理論背景の説明だけでなく考古資料による実証性も必要ではあったが、<sup>(6)</sup> 上述した松木の主張はその後、鉄器文化の果たした役割を捉えるためにあらたな視座をもたらした先駆的研究となったといつてよい。

しかし、鉄文化研究を推進していた村上は鉄素材や鉄器は従来の石器石材の流通ネットワークによって供給されたと考えており、決して鉄・鉄器が新たな流通システムを形成したのではないとした。畿内弥生社会の優位性から想定された鉄などの必需物資の掌握過程の説明には鉄器普及の実態が反映されていないと批判し [村上 1998: 101-103・村上 2000: 58-62]、生産財としての鉄器文化の実証的研究とは別に威信財流通によるイデオロギー生成を分離して考究し、両者がどのような関係であったのかを探る必要性を説いた [北條・溝口・村上 2000: 277-278]。

#### ④……………新たな調査研究成果 第4期

##### (1) 国立歴史民俗博物館による<sup>14</sup>C年代AMS測定

2003年に国立歴史民俗博物館の研究グループは、弥生時代初頭の出土遺物に付着したわずかな炭素を利用して、これまでの想定より著しく古い弥生時代の開始年代を割り出した [春成・藤尾・今村・坂本 2003]。これによると、弥生時代の開始時期はおよそ紀元前10世紀にまで遡るといふ [藤尾 2004a, 設楽 2004 他]。さらには弥生時代中期初頭が紀元前4世紀に遡る可能性まで指摘されることとなった [藤尾・今村 2006]。弥生時代早期は春秋時代を越え、西周時代に併行することとなり、鉄器の出現に関する齟齬が明確となった。先述してきたように、日本列島に舶載された最古の鉄器は福岡県曲り田遺跡の鉄片や熊本県斎藤山遺跡の鉄斧であり、それらは弥生時代早期から前期前葉に属するとされてきた。弥生時代早期が西周時代に併行するのであれば、戦国時代中国東北地域における鑄造鉄器の普及以前に、日本列島において鉄器が出現したということになる。このため、春

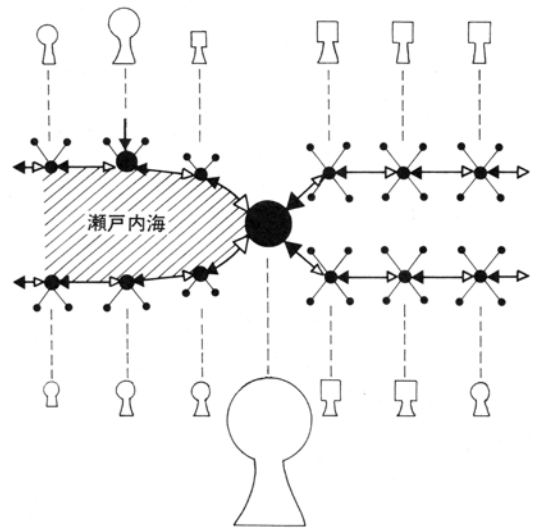


図1 畿内を中心とした物資流通と政治社会のモデル [松木 1996: 257]

成秀爾は弥生時代早・前期に属するとされた鉄器を再検討し、その多くが時期比定に明確な根拠を持っていないものと判断し、日本列島における鉄器出現を中期以降とした〔春成 2003b・2006b〕。春成の再検討によって、弥生時早期から前期前葉とされた鉄器は確実な根拠をもって比定されたとは言い難いことが判明したが、前期末葉以降のものであれば、福岡県下稗田遺跡・福岡県一ノ口遺跡・山口県綾羅木郷遺跡・山口県山の神遺跡・広島県中山貝塚・愛媛県大久保遺跡・京都府扇谷遺跡などにその可能性のある鉄器を指摘できる〔野島編 2008〕。残念ながら詳細な調査報告がなされていないものもあり、厳密な時期を検証するにはなお不明確な部分が多いが、現状では最古段階の舶載鉄器は前期末葉頃に出現した可能性が高いと仮定するのが妥当であろう〔野島 2009a・2010〕。

中期前葉には戦国時代後期、中国東北地域を故地とする定型化した二条突帯斧（鑿先）が舶載鑄造鉄器の代表格となる。すでにこの段階の鉄器の多くが二条突帯斧など鑄造鉄器の破片を再加工したものであることが明らかとなっており〔野島 1992, 村上 1994a・1996・1998〕、弥生時代前期に楚を起源とする鍛造鉄器文化が伝播したとする旧説は鈍などにその可能性は残ったものの、それを積極的に支持する意見はみられなくなっていた<sup>(7)</sup>。AMSによる炭素年代測定を考慮すれば、二条突帯斧が出現する弥生時代前期末葉あるいは中期前葉の一時期が戦国時代後期か、その直後にまで遡る可能性は高いと想定できる〔野島編 2008: 127〕。前漢代併行期とされてきた弥生時代前・中期にいわゆる戦国時代燕の鑄造鉄器が出土するものと考えられてきたが、この舶載時期の遅延はかなり短くなるとみてよい。戦国時代燕の鑄造鉄器自体、より古い時期から普及していた可能性が指摘されることともなってきた〔石川・小林 2012〕。楽浪四郡の設置を遡る時期にすでに戦国系鑄造鉄器が舶載されていたことは疑いのないところといえよう。

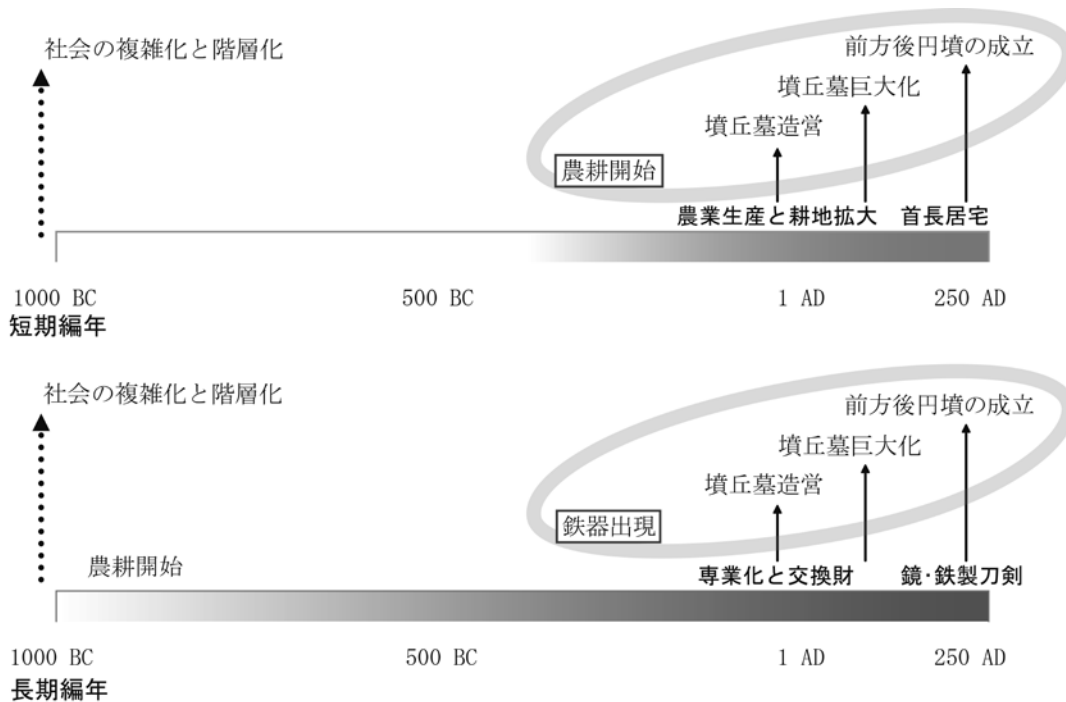


図2 弥生時代の短期編年と長期編年〔野島 2009a: 50 一部改変〕

また、AMSによる炭素年代測定は弥生時代実年代の時間幅の再検討を余儀なくした。農耕社会の発展を考える上においても大きな影響を及ぼすこととなった。従来の編年観の枠組みでは、金属文化、とくに鉄の到来とともに水稻農耕による計画経済が開始されたとしてきた。しかし、弥生時代前期の鍛造鉄器文化に対する批判的・否定的意見によって水稻農耕による計画経済の導入ののち、かなりの年月を経て対外的な交易物資としての鉄器がもたらされたと理解されることとなった(図2) [野島 2009a]。AMS測定によって新たに構築された長期編年観では、農耕の開始から600年を経て、鉄器が使用されたとみられている [藤尾 2011b]。これに従えば、弥生時代当初にもたらされた稲作農耕とその技術体系のなかには鉄器文化が含まれてはおらず、相対的に鉄器文化が弥生社会の農業生産力の維持・向上に直接的に結びついていたとは考えにくいものとなったといつてよい。

## (2) 日本海沿岸域における弥生時代集落と鉄器文化

1990年代後半から2000年代には、日本海沿岸域の弥生時代集落の全面的な調査が相次ぎ、そのおびただしい鉄器出土量においても耳目を引くこととなった。京都府奈良岡遺跡は京丹後市竹野川の中流域、河岸段丘上に立地する玉作りを専業とする弥生時代中期後半の集落である。1995年から1996年の調査では、74基の竪穴遺構が検出された。碧玉・緑色凝灰岩や水晶など、回収しただけでも40kg以上になる原石・未成品・剥片類が出土した。安山岩・玉髓・珪化木製石錐、筋砥石、鉄製工具などの加工具も出土し、玉作りの製作工程が明らかとなり、さらには鍛冶炉の検出から鉄製工具の製作までもが行われていたことがわかった [河野・野島 1997]。

竪穴遺構などからは玉作りに関連する多量の石英・水晶石核や板状剥片および調整剥離を施す四角柱体などとともに、小さな棒状の鉄片が多数出土したが、これらは素材分割・加工用の小型楔や鑿、玉穿孔の際の下孔加工などに使われた鉄製工具とみられた(図3)。

原材料として使用された碧玉やガラス、加工具とされた鉄素材など、およそ地元にはない素材を交易によって入手していたと考えられる。また、狭い丘陵谷間に複数の工房群が密集しつつも、緑

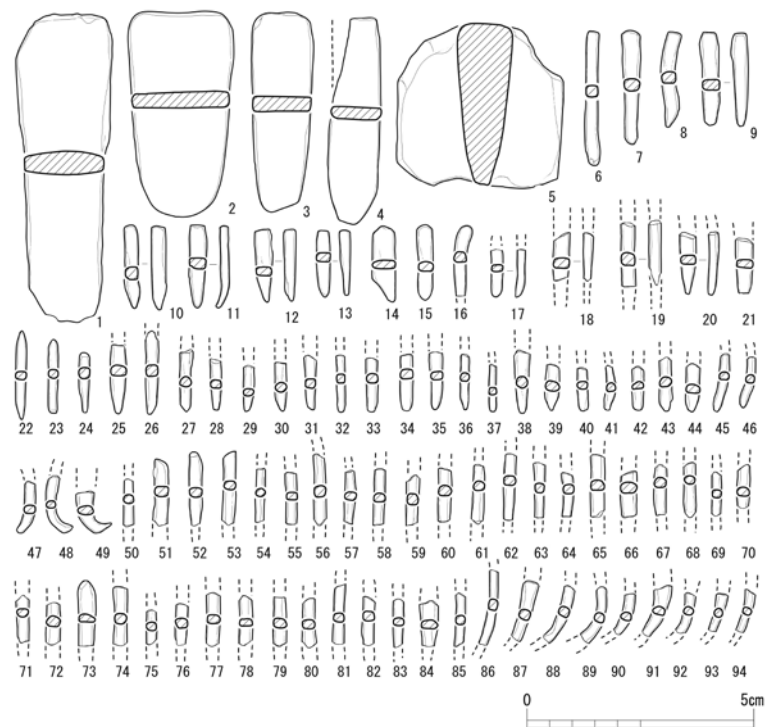


図3 京都府奈良岡遺跡竪穴遺構 SH01 出土玉作り用鉄製工具 [野島2009b:60]

色凝灰岩製管玉の生産域と水晶製玉類やガラス製品の加工・生産域が分離されていた状況からは、縄文時代のヒスイ加工などとは異なり、資源入手のためにより多くの地域との頻繁な交易を行いつつ、共同体構成員の労働編成を行っていたことが想定されるわけで、当時としては計画的な専業生産が実現していたものといえよう。これらの製品がどのように消費されたのかは不明瞭な部分も多いが、京都府三坂神社3号墓や奈良県唐古・鍵遺跡などに類似した水晶製玉類が見つかっており〔今田・肥後他1998：52-53，櫻井・石川他編2009：91〕，地元首長が掌握し，遠隔地との交易を行っていた可能性が指摘できよう。このうち，弥生時代後期には碧玉製管玉や水晶製玉類を鉄錐で穿孔する加工技術が普及し〔野島・河野2001〕，弥生時代後期から終末期には水晶製玉類の生産は近畿北部から山陰地方を経て九州北部にまで技術移転がなされていたこともわかってきた〔河野・野島2003，江野2011〕。

また，日本海沿岸に位置する鳥取県青谷上寺地遺跡の発掘調査が1996年以来，継続して行われた。青谷上寺地遺跡はおもに弥生時代中期から後期に営まれたもので，後期後半から終末期に最盛期を迎える。さまざまな木製品，卜骨，骨角器，大規模な長棟建物家屋材など，一般的には有機質のために遺存しにくい多彩な遺物が大量にみつき，あらためて弥生時代の実像を再考させる衝撃的な調査成果をもたらした。長大な柱材や垂木，小舞からは楼観や高床の大型建物などが建てられていたことが明らかとなった〔茶谷編2009〕。居住人口やその様態，湾岸施設が推測できるような考古資料は不足しているものの，大型建物や船載文物からは「港湾都市」としての機能を果たしていたと想定されるにいたった〔水村2009〕。花卉状の精巧なレリーフ装飾を持つ高杯や透かし孔のある桶形容器など，削り物の加工技術を駆使した高級木器も注目された〔野田・茶谷編2005〕。花卉文様のある精巧な装飾高杯は製作技術や使用木材は地域によって異なるものの，山陰・北陸地方を中心とした日本海沿岸に広域分布圏を形成している。このような装飾高杯が長距離交易によって移動した結果，同じようなデザインが流行したと考えられる。

青谷上寺地遺跡で出土した鉄器の多くは鉄製工具であった（図4）。なかには数種類の小型鑿状鉄器や耳搔き状鉄器などがみられた。田中謙によれば，これらの小型鉄製工具は桶形容器などの削り物細工に使用されたものとされる〔田中2004〕。このような精巧な木器製作に使用される特殊な小型鉄製工具は山陰地方にしかみられないことも指摘されており〔村上2005〕，弥生時代後期までに

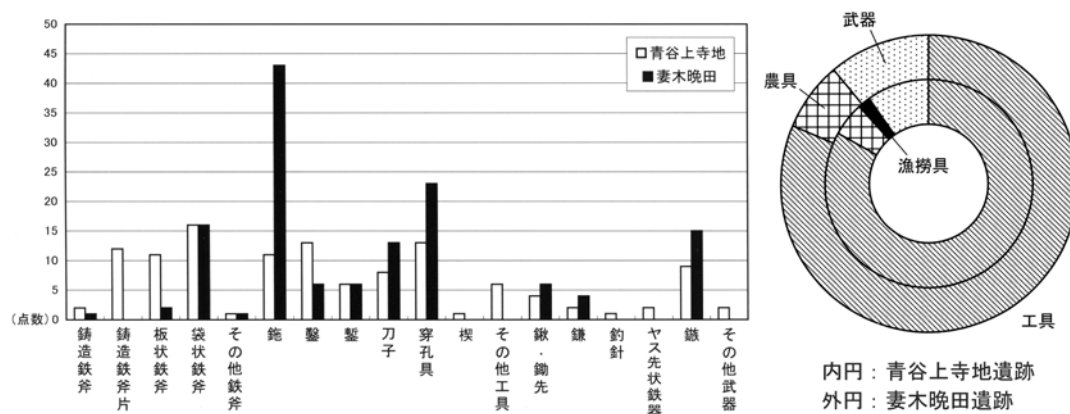


図4 鳥取県青谷上寺地遺跡(内円)と妻木晩田遺跡(外円)出土鉄器の器種構成〔水村編2011：120,123〕



は鉄斧や鉋などの一般的な木工具としてだけでなく、高級木器生産に特化した小型鉄製工具が製作、使用されていたとすることができるのである。

以上、注目された2遺跡のみに留めるが、日本海沿岸域では稲作農耕の拡大再生産のために鉄素材が耕起具や収穫具の刃先に加工されたわけではなかった。一般集落においては、鉄鏃などが普及するものの、協業労働をとまなう水晶製玉類や高級木器などの工芸品生産に特殊な小型鉄製工具が利用されていったことが具体的に明らかになったといえる。高級工芸品は対外的な交易資源ともなりやすく、日本海沿岸域の首長達を中心としたネットワークが形成されていった可能性も指摘されることとなった〔野島 2009a・b〕。日本海沿岸域における弥生時代集落の調査例はこのほかにも増加しており、そこから出土する鉄器数量と鉄器のバラエティは瀬戸内地域や畿内地域などよりも豊富であることがわかってきた。韓半島南部の鉄素材獲得に関して九州北部のみを窓口とする必然性はなく、鉄資源の供給ルートを一元的にとらえる論調が低減していく一因ともなったのである。

### (3) 威信財鉄器の流通論

都出の初期国家形成論における物資流通論や松木の対外的必需物資流通論が大きな契機となり、国家形成に関わる「重要流通物資としての鉄・鉄器」がクローズアップされてきたが、物資流通と社会関係の生成・発展に関わる反論もいくつかみられた。なかでも溝口孝司はM・モースの贈与論<sup>(8)</sup>を機軸に据え、最高首長に対する依存関係が広がっていくビッグマン・システムの理念的過程をモデル(連鎖型・放射型・樹状型)として説明し、必需物資(生産財)の広域流通機構や強制的な征服行為によらずとも、広域にわたる序列ある統合が実現できるとした〔溝口 2000〕。その際、最高首長への依存・畏敬を抽象化することのできる象徴的・意味的な財(β型財)としての威信財を重視した。

威信財(prestige goods)という用語は近年、日本考古学において定着したが、元来、K・エクホルム〔Ekholm 1972〕やC・メイヤスー〔Meillassoux 1978〕など経済人類学の研究成果に見いだされ、C・ハセルグロブ〔Haselgrove 1982〕らがヨーロッパのローマ時代の考古事象に適用したものである。日本においても穴澤味光がその用語概念を紹介し、古墳時代初頭に威信財として三角縁神獣鏡の再分配がなされ、特殊な経済システムが成立したという試論がなされた〔穴澤 1985〕<sup>(10)</sup>。考古学に援用された時点での意味からすれば、長距離交易によってもたらされる外界からの貴重財で、入手した所有者の威信(あるいは贈与者への畏敬)を発揮し、不均衡な社会関係を作り出す財であると定義することができる(図5)。W・ヘルムスによると、長距離交易によってもたらされる威信財や希少資源には高位の人智が観念的に備わっており、それらの入手が首長のリーダー・シップを正当化させるという。首長はこのような異界からの物質の入手をコントロールすることによって超自然的世界との交渉も可能であると意識され、その交易によって得られた一種の奥義的人智は首長の権威と正当性に深く関わるものであったとする〔Helms 1991〕。長距離交易によってもたらされた貴重財が単純な経済的利益のみならず、その分配の連鎖を通して宗教的規範をももたらしつつ遠隔地に広がり、階層社会の維持・再生産と首長権力の精神的基盤ともなると説いた。溝口が平易に説明した視点と重なる部分も多い。威信財の分配や流通によって財のもつ精神世界観に基づく、より思想的な面での社会関係が再生産される効果を持つ点で「外来性」という属性の意味は大きいとい

えよう。また、威信財の流通によって成り立つ全体的な経済（威信財経済、威信財システム）は当然ながら、社会全体の給付関係や社会的再生産に寄与しており、各地域の共同体（基礎単位）への生産財鉄器などの給付が組み込まれていたとみてよからう。

マルクス主義経済人類学と新進化主義人類学による成果を理論的枠組みに援用した辻田淳一郎も先に溝口が「新論理構造」として説いたように、畿内優位の前提とともに農業生産力と階級社会の発展結果として古墳時代の成立を想定するのではなく、威信財を贈与・分配するエリート層の社会

関係の再生産活動が前方後円墳の造営や儀礼的葬送を作り出していく営力となるとみている。3世紀中葉の魏への遣使と中国鏡の大量輸入こそが古墳時代を開始させる主要な契機であったとし〔辻田 2007: 357〕、威信財の流入によって社会的再生産を可能ならしめる広範な経済システムが成立したことを追認した。

筆者もまた、弥生時代後期の日本海沿岸域における鉄製大刀・長剣などの輸入から、弥生時代首長達の未熟な威信財経済が醸成されていたことを主張した〔野島 2009a・2009b: 260・2010〕。先述したように、日本海沿岸域では集落内の労働力を再編成して貴重財・高級品を生産し、対外交易に利用する様相をみることもできたが、後期には鉄製大刀や長剣などが輸入され、巨大化した方形墳丘墓に副葬された（図6）。このような刀剣類は、おそらくは溝口のいう連鎖型あるいは放射型となる首長間の依存関係を作り出す贈与交換に利用され、素環頭部分の切除などといった拵えの改変が行われたものとみた〔野島 2004・2009b〕。日本海沿岸域において首長間における威信財鉄器の流通とともに共同体構成員への生産財鉄器の充足を行うといった威信財経済が生み出されていたとみてよからう。その後、船載鏡の大量輸入を契機として古墳時代前期には列島規模の威信財経済が成立する。鉄製刀剣類の出土数が格段に増加した古墳時代前期の段階には、近畿中枢域、大和の前方後円墳に大量の鉄製刀剣類が副葬されていたことから、大和の大首長を始点として列島各地に広がる広範な贈与交換が行われ、その連鎖が樹状に広がったものと想定することができよう（図7）。

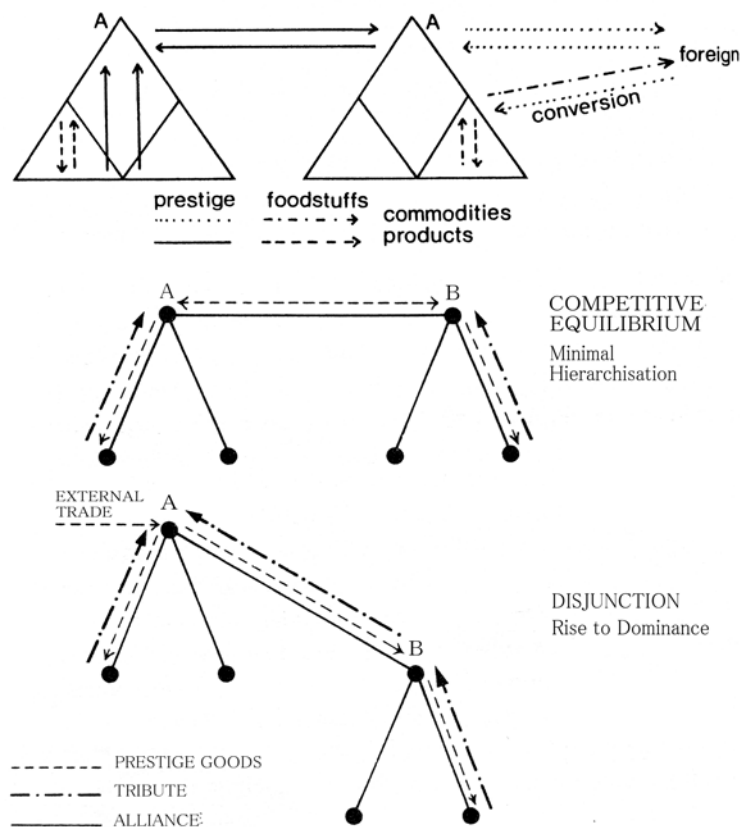


図5 外部との交易と威信財 [Meillassoux 1978: 152, Haselgrove 1982: 81]

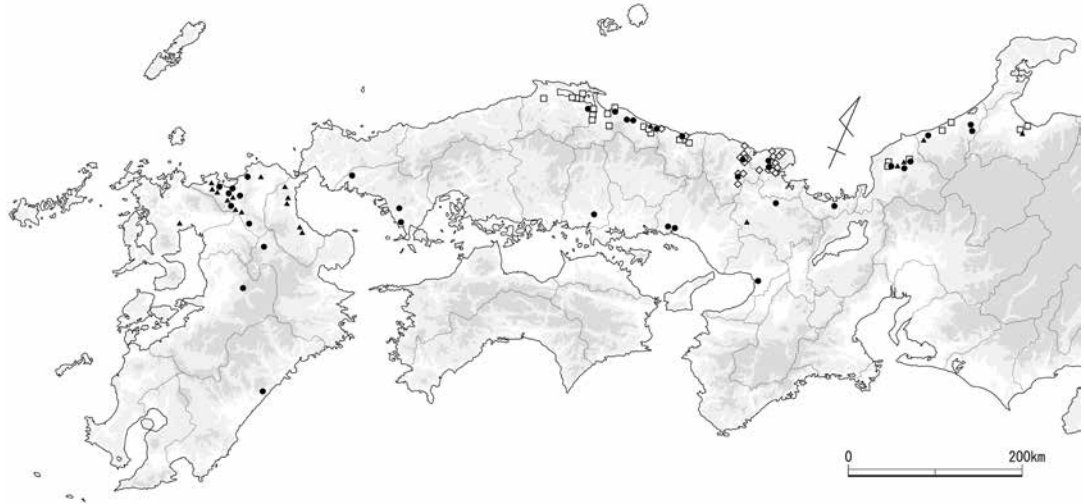


図6 弥生時代後期後半期・終末期の方形墳丘墓と鉄刀出土位置 [筆者作成]  
 (▲素環頭鉄刀 ●鉄刀 □四隅突出型墳丘墓 ◇方形墳丘墓・方形台状墓)

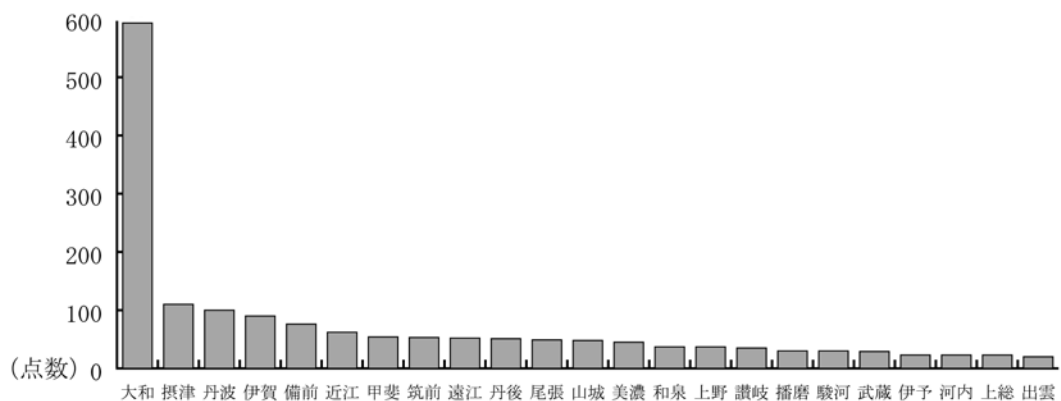


図7 前期古墳副葬鉄製刀剣類の地域別出土数 [野島 2010: 163]

## ⑤……………鉄器文化の実像をみる歴史認識の枠組み

### (1) 鉄器文化を見つめる視点—演繹論と帰納論

鉄器文化の研究が始まった第2期の段階では、いまだ弥生時代の鉄器の出土量は少なく、後世からみれば、抽象的あるいは理念的な理解にならざるをえなかったといえる。第1期に導入された史的唯物論が踏襲され、社会構造の変化を「みえない鉄器の普及」を介在させて説明しようとする演繹的な方法論が支配的となった。鉄器の導入によってどのように生産力が発展し、階級社会へと向かっていくのか、論者によっても様々ではあったが、鉄刃農耕具による農業生産力の発展のためには鉄生産の存在が必然的な前提として認識され、議論されていった。弥生時代後期を前方後墳の成立に結実する階級社会への起点とし、石器の消滅と鉄器の普及を表裏の現象として捉えた。鉄刃

農耕具の導入による農耕社会の発展と階級社会の出現を理論的枠組みとし、農業生産力において自律的な発展を遂げた畿内中枢部における前方後円墳社会の成立を演繹的に描き出した。

第3期には、鉄器の型式論や分布論、あるいは製作技術を重視する帰納論に一定の成果をみることができた。理化学分析の成果が積み重ねられ、東アジアにおける鉄器文化の伝播論を理論的枠組みとした遺物論や製作技術論を展開してきた。弥生鉄器文化研究が個別専門分野として独立した時期でもあった。第3期から第4期には、鉄器資料の激増によって弥生時代における各種鉄器の多寡、組成、分布状況や地域間格差などが明らかになっていった。九州北部以外の地域においては熟練した熱処理を伴う鍛冶技術が普及していなかったことも判明し、鉄生産の可能性も低く見積もられることとなった。畿内地域において鉄刃農耕具による農業生産力の全般的な向上を想定できなくなる状況にも直面していた。その結果、考古学の国際化の進展とともに新たな歴史認識の枠組みとして構造マルクス主義人類学や新進化主義人類学などを援用した(初期)国家形成論が導入されはじめた。<sup>(11)</sup>都出の初期国家論や松木の流通論では、韓半島に鉄資源を依存していることを前提とし、対外的交渉によって得られた広域流通物資の管理機構の発生を重視して、国家形成と鉄器文化の密接な関係を説いた。これまでとは一線を画するものであったが、帰納論による鉄器普及の実態との乖離から村上らの批判を受けた。贈与連鎖によって、首長間の依存関係が広域に形成されるモデルが溝口によって提示されることとなり、利器としての鉄器がもたらす恩恵だけでなく、その流入によって様々なレベルでの社会関係が新たに築かれていくとともに、供給側への威信や畏敬が生み出される不均衡な社会関係が強調されるようになったのである。

## (2) 生産用具としての役割

弥生時代には鉄刃農耕具が普遍的には普及してはいなかったことが明らかとなったが、鉄製工具による木製農耕具の加工生産によって灌漑などのインフラ整備、沖積低地の開発が効率的に行いうるようになったとも想定できることから、間接的に農業経営規模の拡大と生産力の発展に寄与したという点においては農業生産力に関わる原動力としての鉄器文化の実像を否定できるものではない。しかし、これにくわえて日本海沿岸域においては玉作りや高級木器の加工生産に特殊な小型鉄製工具を使用していたことが明らかとなってきた。いずれもわずかな鉄資源から様々な小型鉄製工具を作り出しており、鉄資源を有効に利用して新たな価値を作り出す独自の工夫を行っていた。生産した貴重財・高級品を交易資源として利用し、連鎖する長距離交易ネットワークの維持・拡大を目論んだ首長達の姿を想像することもできよう[野島 2009a・2009b: 69,258-260]。近藤が指摘したように[1982b]、外部物資との交換のための分業の発展と交易に関する首長の主導権の発動をここに具体的にみることができるようになったのである。

## (3) 変化する価値

20世紀の経済人類学の研究成果のひとつに、貨幣経済導入以前の交換経済では、貨幣による価値の統一や一元化がなされていないことが「再発見」されたことがある。交換可能な財はそれぞれが交換される財の閉鎖的集合領域をもって存在しており、それが一定の序列によって階層化されているということが民族誌から指摘されている[Bohannon 1955, ムーニエ 1984]。これに従えば、

一般的には使用価値の高い財は日常的に消費されるものが多く、その際の交換領域は食料品などと同等、あるいは近似するものであると見てよい。弥生時代前期末葉から中期前葉前後の鑄造鉄斧破片の使用に際しては、鍛冶加工ではなく、もっぱら研磨によって刃部が作り出されていたため、その使用価値は限定的なものであったとみてよく、広域の流通網は形成されなかった。中期中葉から後葉以降、一般的な生産財鉄器（鉄鏃や農具）が製作され、経済基盤の維持のために日常的に使用されていった。鍛冶加工の技術水準によってその使用価値が制限されるものの、九州やその周辺域では後期以降、一定の流通量がみられるため、その交換価値は上昇していたと考えてよさそう。しかし、日本海沿岸域の玉作りや高級木器の加工に使用された特殊小型鉄製工具は著しく限定された用途のため、それ自体は一般的な交換に資する価値を生み出すものとはみなされなかったとみられる。

一方で、象徴的な価値の高い威信財は首長間で取り結ばれる社会関係を維持・再生産する方向に働いたと思われる。船載された大刀や長剣などはその入手経緯にもよるが、おそらくはその多くが威信財として個别人格にも似た性格や意味、高い象徴性をもったとみられる。日本海沿岸域に高次の閉鎖的交換領域を創りだし、首長間の長距離交易の契機ともなったのであろう。

鉄器普及の遅れた地域（瀬戸内から畿内地域）では、威信財鉄器がもたらされる機会は相対的に少なかった。決して高い鍛冶技術を保持していたわけではなかったため、一定の使用効果をもった生産財鉄器でも、その使用価値にはそれなりの限界があったと思われる。だが、それらの鉄器を希求する気運が著しく強くなれば、その交換価値はかなり上昇し、威信財に近い交換領域を形成した可能性もあろう。鉄を機軸とした新たな流通経済への移行に際して、少ない鉄資源でも地域の共同体へ再分配を行った吉備や畿内の首長達はより大きな威信を得ていたとみることもできよう〔松木 2007: 259-261, 284〕。鉄器の普及とその使用による実益（経済基盤の維持）とは別に、瀬戸内から畿内地域以東の広範な地域において鉄・鉄器の所有・使用に対する潜在的な欲求が経済活動と社会内部の諸関係の構造を変容させていったとするわけである。鉄器普及の後背地域では、九州北部や日本海沿岸域の首長達よりも大きな贈与交換のネットワークを水面下で作りあげつつあったのかもしれない<sup>(12)</sup>。古墳時代成立前後には高度な鍛冶技術が急速に普及し、使用価値だけでなく交換価値も上昇し、溝口の言う樹状型の首長間の贈与交換の連鎖と共同体構成員への再分配によってさらなる広域流通が実現することとなったものとみられる。

これまでの生産様式論では鉄器文化に対する評価は絶大なものがあつた。しかしそれは「農業生産力に関わる鉄刃農耕具」の使用価値のみが強調されていたと見てよい。結局のところ、弥生社会における鉄・鉄器はその機能差だけではなく、鍛冶技術水準や入手経路、入手地域、財としての交換領域などの違いでさまざまな価値と意味を生み出し、その所有や贈与を通して社会関係に関与していったものと想定すべきであろう。日本考古学に伝統的な唯物史観による「(農業)生産力発展の原動力」といった鉄器文化の実像は否定されるものではないが、それを古墳時代成立に直接的に関与させる論調は低減した。西欧人類学の援用による演繹的立論によって「広域流通に関わる使用価値の高い物資（生産財鉄器）」あるいは「贈与交換を機軸として不均衡な社会関係を作り出す物資（威信財鉄器）」といった実像が付加されてきたといえるのである。

## おわりに

今回の共同研究（「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」2009～2011年度、藤尾慎一郎代表）のテーマとなった弥生時代像の再構築という趣旨から、「鉄器文化の役割の見直し」を本論の目的とし、弥生時代後半期の鉄器文化と社会発展に関する研究動向の整理と分析をおこなった。農耕社会と鉄器文化に関わる過去の考古学的な言及は膨大なものである。その詳細な評価は日本考古学だけでなく金属学的分析から歴史・人類学的見識まで多方面にわたる深い学識が必要となり、到底筆者に成しうるものではなかった。鉄器文化の研究史にある少数意見や個別研究の理論背景とその変化、文脈のニュアンスを捨象し、単純な図式として捉えることで、現在の視点から鉄器文化の歴史的役割とその評価について、研究の変遷を追うこととしたが、日本考古学研究を主導した先学への非礼に当たる部分があるとすれば、それを意図したわけではなく、ただ鉄器文化を見つめる新たな視座の模索と鉄器文化研究のさらなる発展を期待してのことと、お許し願いたい。今はなき先生方にお聞きすべきことがたくさんあったことをあらためて痛感している。

なお、鳥取県埋蔵文化財センター水村直人氏の作成した図（図4）を一部掲載した。藤尾慎一郎氏の近著〔藤尾2011a・b〕にも啓発されるところが多かった。記して両氏に感謝したい。

### 註

(1)——一般的な考古学の概説書の場合、弥生時代の社会に関する記述に、『三国志』魏書東夷倭人条に描かれた倭人社会の風習について多くが割かれているものもあり、近年でも弥生社会の金属器文化については青銅器のみの記述も少なからず見られた。それらは今回の検討対象とはしなかった。

(2)——鉄素材や鉄器のほかにも「保持する集団ないし人物の原始的権威を単に表現するためのものであったということ」を根底の理由〔近藤1982b:61〕とする青銅製品や、南海産の貝輪、日本海沿岸の碧玉製品を挙げ、必需物資としての備讃瀬戸の塩などが広範な流通を物語るものとしている。

(3)——当時、刻目突帯文土器後半期を縄文時代晩期と捉える意見も依然としてあり、潮見や川越らは、この曲り田遺跡出土鉄片を「縄文時代晩期の鉄」とした。

(4)——川越は斎藤山遺跡出土鉄斧を中国江南に技術系譜を持つ鍛造鉄斧としたが〔川越1979〕、翌年には中国東北部に起源をもつ鑄造鉄斧とした〔川越1980〕。弥生時代の鉄器文化研究の第一人者でも斎藤山遺跡出土鉄斧の評価については迷ったのであろう。また、1980年代になると鍛造鉄器文化の導入が喧伝されるなか、弥生時代前期の鍛造鉄器やその製作を示す鉄滓の出土事例が相

次いだ。報告者は出土位置が不明確な場合でも弥生時代前期に遡る可能性が少しでもあるならば、さらに重要な考古資料になるといった意義を重んじて前期の可能性を指摘し、注意喚起を促したきらいもあった。しかし、現在では弥生時代前期の所産とは確実視できないものも多い〔設楽2004〕。

(5)——近年では、弥生鉄器の中性子放射化分析も進み、韓半島産と日本列島産の弁別にもある程度成功した。大規模な弥生製鉄の根拠となるような結果はみられなかったものの、阿蘇山周辺ではリモナイトによる製錬を想定しうる可能性がある〔村上1992〕。製鉄自体、採鉱から鍛冶までの一連の技術体系がシステムとして導入されない限り、日本列島内での採鉱・製錬が開始されるとは考えにくいとの指摘〔藤尾2005〕もあることから、今後とも製錬遺構の検出とともに状況証拠としての技術体系の確認がなされねばならない。

(6)——『文明学原論』に掲載された中村慎一の論考、「世界のなかの弥生文化」〔中村1995〕は新進化主義人類学・考古学の研究成果を平易に紹介し、弥生社会とチーフダム（首長制社会）段階の社会類型との比較検討を行ったものであった。外来品としての威信財、富の再分配が政治的集権化をもたらすといった研究成果〔Friedman

and Rowlands 1978] を重視し、特殊工芸品の製作と長距離交易の管理を掌握することが弥生社会を理解するために必要であることを明言している [中村 1995: 388-392]。日本考古学の中で育ってきた弥生時代研究者が新進化主義人類学といった、異なる視点で弥生社会を見直すことを容易にただけでなく、その後、弥生社会と首長制社会の研究成果を結び付けて比較し、弥生社会を題材とした比較考古学的研究の重要な契機のひとつとなった。

(7)——Indo-Pacific Beads に関する調査研究が進み、中国江南地域あるいはそれ以南から韓半島や楽浪郡を経由してガラス製品が舶載された可能性が重視されてきた [谷澤 2011]。中国南部からの文化的影響については鉄器文化においても個別遺物の研究を通じて、その可能性も引き続き模索されるべきと考える。

(8)——M. モースは B. マリノフスキーが見出した財の交換の現象を全体給付体系と呼び、贈与によって引き起こされる様々な財やサービスの交換によって形づくられた社会全体の流通と消費の総体を市場社会の功利主義とは異なる次元のものとして捉えた。交換される財が祖霊や自然、神といった超自然的な観念と隠喩的に結びついていた場合、そのモノ自体が体系的な贈与の連鎖を稼働させるほどの強制力をもつとも観念されていたことを示唆した [モース 1923-25]。

(9)——近年、下垣仁志は威信財と威信財経済に関する研究成果をまとめ、古墳時代の銅鏡について新たな研究視点を提唱した [下垣 2010]。

(10)——佐々木憲一は前方後円墳の規格や三角縁神獣鏡などの配布は不可譲な財の贈与として行われたとみる [佐々木 2003]。この不可譲な財とはアメリカの人類学者 A. ワイナーがトロブリアンド諸島の女性特有の財の観察によって定義した概念で、財の送り手が受け手に財を譲渡しながらも、その財の送り手が元々の所有権を維持しつつ、かつ受け手側に一定の慣習的な影響力をもたらす財のことをいう [Weiner 1992]。このような特殊財は神やその神話、祖先系譜などを内包するもので、時間とともにそれは確固たるものとなる。不可譲な富と呼ばれる特殊な財の流通、つまり贈与と交換の連鎖によって、財の所有権の保持者であるももとの送り手には強大な政治的影響力がもたらされていったものとみられるわけである。

(11)——新進化主義的人类学的首長制社会研究成果の援用だけでは、古墳時代の成立過程を明確に描写しえないと考える研究もある。例えば、福永伸哉はギアーツの劇場国家論やタンバイアの銀河系政体論を視点とし、古墳時代の儀礼的な古墳祭祀の実態を明らかにしようとしてみせた [福永 2005]。

(12)——鉄器普及の遅れた地域では、鉄の交換価値を意識した危機感が鉄器の普及を拒絶する共同体規制となって働き、鉄に抗する社会を作り出し、大きな社会の結末に向かったとする見解もみられるようになってきた [北條 2011]。鉄器の使用による実益ではなく、その流通に対する社会の反応が新たな社会関係を作り出していくことを強調する共通性がある。

#### 引用・参考文献

- 穴澤味光 1985「三角縁神獣鏡と威信財システム(上・下)」『潮流』第4・5報, 1-3頁。  
 穴澤味光 1995「世界史のなかの日本古墳文化」『文明学原論』江上波夫先生米寿記念論集, 古代オリエント博物館, 山川出版社, 401-424頁。  
 甘粕 健 1986「弥生時代の生産と流通」『岩波講座日本考古学』3, 生産と流通, 岩波書店, 13-24頁。  
 石川恒太郎 1959『日本古代の銅鉄の精錬遺蹟に関する研究』角川書店。  
 石川岳彦・小林青樹 2012「春秋戦国期における初期鉄器と東方への拡散」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集, 国立歴史民俗博物館, 1-40頁。  
 石川日出志 2008「弥生時代=鉄器時代説はどのようにして生まれたか」『考古学集刊』第4号, 31-52頁。  
 石村 智 2004「威信財システムからの脱却」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会, 279-288頁。  
 今田昇一・肥後弘幸他 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集, 大宮町教育委員会。  
 内田好昭 2008「歴史過程としての先史—マルクス主義歴史学と考古学的文化史—」『マルクス主義という経験』青木書店, 91-127頁。  
 江野道和 2011「伊都国の玉作遺跡～潤地頭給遺跡を中心に～」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国』日本玉文化研究会, 41-68頁。  
 エンゲルス, F. 1884 (村井康男・村田陽一訳 1954)『家族, 私有財産および国家の起源』大月書店。

- 大澤正己 1977「福岡平野を中心に出土した鉾滓の分析」『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第41集, 福岡市教育委員会, 195-218頁。
- 大澤正己 1983「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会, 85-164頁。
- 大澤正己 1995「弥生時代の鉄器の世界～金属学的調査からのアプローチ」『弥生の鉄文化とその世界』記念講演会資料, 北九州市立考古博物館。
- 大澤正己 1997『古代交野と鉄』平成9年度交野市民文化財講座講演会資料, 交野市教育委員会。
- 大澤正己 2000「弥生時代の初期鉄器「可鍛鑄鉄製品」—金属学的調査からのアプローチ—」『たたら研究会創立40周年記念製鉄史論文集』たたら研究会, 513-552頁。
- 大澤正己 2004「金属学的分析からみた倭と加耶の鉄—日韓の製鉄・鍛冶技術—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第124集, 国立歴史民俗博物館, 89-122頁。
- 大場磐雄 1969「弥生文化総説」『新版考古学講座』原史文化〈上〉, 第4巻, 雄山閣, 1-22頁。
- 岡崎 敬 1956「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』第42巻第1号, 14-29頁。
- 岡本明郎 1958「鉄をめぐる話題」『私たちの考古学』16, 2-3頁。
- 岡本明郎 1961「弥生時代における金属生産の技術的・社会的諸問題—岡山県熊山町弥生発見の弥生時代の鉄塊に関しての一試論—」『古代吉備』第4集, 139-147頁。
- 小田富士雄 1977「鉄器」『立岩遺蹟』河出書房新社, 207-242頁。
- 乙益重隆 1961「熊本県斎藤山遺跡」日本考古学協会編『日本農耕文化の生成(本文篇)』東京堂出版, 119-132頁。
- 鏡山 猛・乙益重隆 1969「九州」『新版考古学講座』原史文化〈上〉, 第4巻, 雄山閣, 25-43頁。
- 川越哲志 1968a「鉄および鉄器生産の起源をめぐる」『たたら研究』第14号, 7-15頁。
- 川越哲志 1968b「1967年の動向—弥生時代—」『考古学ジャーナル』no.19, 17-21頁。
- 川越哲志 1974「弥生時代鉄製工具の研究(1) —板状鉄斧について—」『広島大学文学部紀要』第33巻, 172-193頁。
- 川越哲志 1975「金属器の製作と技術」『古代史発掘』4, 講談社, 104-116頁。
- 川越哲志 1977「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集—慶祝松崎寿和先生63歳論集—』松崎寿和先生退官記念事業会, 181-202頁。
- 川越哲志 1979「金属器の普及と性格」『日本考古学を学ぶ』(2), 有斐閣選書, 81-105頁。
- 川越哲志 1980「弥生時代の鑄造鉄斧をめぐる」『考古学雑誌』第65巻第4号, 1-23頁。
- 川越哲志 1993a「日本の鉄製錬の開始時期をめぐる—弥生製鉄存否論各説—」広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社, 293-308頁。
- 川越哲志 1993b『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版。
- 河野一隆・野島 永 1997「奈良岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 30-82頁。
- 河野一隆・野島 永 2003「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐる」『京都府埋蔵文化財情報』第88号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 7-16頁。
- 喜田貞吉 1918「日本民族概論」『国史講習録』課外講義(『喜田貞吉著作集』8巻, 民族史の研究, 平凡社, 31-51頁)。
- 喜田貞吉 1938「日本民族の構成」『日本文化史大系』第1巻(『喜田貞吉著作集』8巻, 民族史の研究, 平凡社, 52-76頁)。
- 君嶋俊行編 2012『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』8, 木製農工具・漁撈具, 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告47, 鳥取県埋蔵文化財センター。
- 清野謙次 1925『日本原人之研究』岡書院。
- 清野謙次・金閔丈夫 1935「日本石器時代人種論の變遷」『日本民族』岩波書店, 9-73頁。
- 小林行雄 1938「弥生式文化」『日本文化史大系』第1巻, 誠文堂新光社, 214-253頁。
- 小林行雄 1951『日本考古学概説』東京創元社。
- 小林行雄 1952『日本民族』日本人類学会(小林行雄 1961「古墳時代文化の成因」『古墳時代の研究』青木書店, 49-74頁)。
- 近藤義郎 1955「鉄製工具の出現」『世界考古学大系』2, 日本II 弥生時代, 平凡社, 34-41頁。
- 近藤義郎 1957「初期水稻農業の技術的達成について」『私たちの考古学』15, 2-12頁。
- 近藤義郎 1960「鉄製工具の出現」『世界考古学大系』第2巻, 平凡社, 34-41頁。
- 近藤義郎 1962「弥生文化論」『岩波講座日本歴史』第1巻, 原始および古代1, 岩波書店, 139-188頁。
- 近藤義郎 1966「弥生文化の発達と社会関係の変化」『日本の考古学』III, 弥生時代, 河出書房新社, 442-459頁。
- 近藤義郎 1982a「鉄器と農業生産の発展」『前方後円墳の時代』岩波書店, 26-52頁。



- 近藤義郎 1982b 「手工業生産の展開」『前方後円墳の時代』岩波書店, 53-79 頁。
- 近藤義郎・岡本明郎 1957 「日本における初期農業生産の発展」『私たちの考古学』14, 14-15 頁。
- 櫻井拓馬・石川ゆずは・西岡成晃 2009 『唐古・鍵遺跡』Ⅰ, 特殊遺物・考察編, 田原本町文化財調査報告書第5集, 田原本町教育委員会。
- 佐々木憲一 2003 「弥生から古墳へ—世界史のなかで—」『古墳時代の日本列島』青木書店, 3-22 頁。
- 佐々木 稔・村田朋美・伊藤 薫 1984 「出土鉄片の金属学的調査」『石崎曲り田遺跡』Ⅱ, 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集, 福岡県教育委員会, 429-431 頁。
- 佐々木 稔 1993 「弥生時代の鉄と鉄器製作技術」『古文化談叢』第30集, 九州古文化研究会, 1061-1088 頁。
- 佐原 眞 1975 「農業の開始と階級的社会の形成」『岩波講座日本歴史』1, 岩波書店, 113-182 頁。
- 潮見 浩 1970 「わが国古代における製鉄研究をめぐって」『日本製鉄史論』たたら研究会, 155-172 頁。
- 潮見 浩・藤田 等・木下 忠・本村豪章 1958 「農業生産の発達(要旨)」『私たちの考古学』16, 4 頁。
- 潮見 浩 1982 「日本の初期鉄器文化」『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館, 280-282 頁。
- 潮見 浩 1986 「鉄・鉄器の生産」『岩波講座日本考古学』3, 生産と流通, 岩波書店, 238-262 頁。
- 設楽博巳 2004 「AMS 炭素年代測定による弥生時代の開始年代をめぐって」『歴史研究の最前線』1, 吉川弘文館, 97-129 頁。
- 下垣仁志 2010 「威信財論批判序説」『立命館大学考古学論集』V, 立命館大学考古学論集刊行会, 97-124 頁。
- 白石太一郎 1993 「古墳成立論」『新版古代の日本』1, 古代史総論 角川書店, 163-190 頁。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告第16冊, 桑名文星堂。
- 杉原莊介 1943 『原史学序論』葦牙書房。
- 杉原莊介 1955 「弥生文化」『日本考古学講座』第4巻, 河出書房, 2-30 頁。
- 杉原莊介 1956 「農耕生活の発達」『図説日本文化史大系』第1巻, 164-181 頁。
- 杉原莊介 1960 「農業の発生と文化の変革」『世界考古学大系』第2巻, 平凡社, 1-13 頁。
- 杉原莊介 1961 「日本農耕文化の生成」日本考古学協会編『日本農耕文化の生成(本文篇)』東京堂出版, 3-33 頁。
- 高倉洋彰 1985 「初期鉄器の普及と画期」『九州歴史資料館 研究論集』10, 九州歴史資料館, 21-50 頁。
- 高倉洋彰 1986 「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, 801-836 頁。
- 高倉洋彰 1990 「初期鉄器の普及と画期」『日本金属器出現期の研究』65-100 頁。
- 田中 謙 2004 「弥生時代鉄製工具論の可能性」『鉄器文化の多角的探究』鉄器文化研究集会第10回大会, 鉄器文化研究会, 41-58 頁。
- 田辺昭三 1956 「生産力発展の諸段階—弥生式時代における鉄器について—」『私たちの考古学』11, 5-13 頁。
- 田辺昭三 1961a 「農耕社会の成立」『講座日本文化史』第1巻, 日本史研究会, 61-79 頁。
- 田辺昭三 1961b 「古代文明の諸条件」『講座日本文化史』第1巻, 日本史研究会, 80-94 頁。
- 谷澤亜里 2011 「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通—北部九州地域を中心に—」『九州考古学』第86号, 1-39 頁。
- 茶谷満編 2009 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』4, 建築部材考察編, 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告25, 鳥取県埋蔵文化財センター。
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎。
- 津田左右吉 1919 『古事記及び日本書紀の新研究』洛陽堂。
- 津田左右吉 1924 『古事記及び日本書紀の研究』岩波書店。
- 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号, 36-51 頁。
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」『講座日本史』1, 古代国家, 東京大学出版会, 29-66 頁。
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史』1, 原始・古代1, 東京大学出版会, 117-158 頁。
- 都出比呂志 1990 「日本古代の国家形成過程—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第338号, 3-8 頁。
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第343号, 5-39 頁。
- 都出比呂志 1996 「国家形成の諸段階」『歴史評論』no.551, 3-16 頁。
- 都出比呂志編 1998 『古代国家はこうして生まれた』角川書店。
- 寺沢 薫 2000 『王権誕生』日本の歴史02, 講談社。
- 富岡謙蔵 1918 「王莽時代の鏡鑑と後漢の年号銘のある古鏡に就て」『考古学雑誌』第8巻第5号, 243-257 頁。
- 富山正明 1997 「福井県林・藤島遺跡出土の鉄製品—弥生時代後期の玉作り工具を中心に—」『東日本における鉄器

- 
- 文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会発表要旨集，鉄器文化研究会，167-190頁。
- 鳥居龍蔵 1918『有史以前の日本』磯部甲陽堂（『鳥居龍蔵全集』第1巻，167-453頁）。
- 鳥居龍蔵 1925『人類学上より見たる我が上代の文化』叢文閣（『鳥居龍蔵全集』第1巻，3-166頁）。
- 中村慎一 1995「世界のなかの弥生文化」『文明学原論』江上波夫先生米寿記念論集，古代オリエント博物館，山川出版社，381-400頁。
- 中山平次郎 1917「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て(1)・(2)」『考古学雑誌』第7巻第10・11号，595-632頁，667-700頁。
- 中山平次郎 1918「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て(3)・(4)」『考古学雑誌』第8巻第1・3号，16-41頁，129-161頁。
- 西谷 正 1970「朝鮮における初期鉄製品の問題」『日本製鉄史論』たたら研究会創立10周年記念論集，たたら研究会，46-65頁。
- 禰宜田佳男 1992「近畿地方の石斧の鉄器化」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第1集，大阪府立弥生文化博物館，65-74頁。
- 禰宜田佳男 1998「石器から鉄器へ」都出比呂志編『古代国家はこうして生まれた』角川書店，51-102頁。
- 禰津正志 1935「原始日本の経済と社会」『歴史学研究』4巻4-5号（『日本原始共産制社会と国家の形成』校倉書房，176-198頁）。
- 野島 永 1992「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第32・33号，20-30頁。
- 野島 永 1993「弥生時代鉄器の地域性」『考古論集—潮見浩先生退官記念論集—』潮見浩先生退官記念事業会，433-454頁。
- 野島 永 2000「鉄器からみた諸変革—初期国家形成期における鉄器流通の様相—」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会，75-102頁。
- 野島 永 2004「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』広島大学大学院文学研究科文化財学研究室，541-552頁。
- 野島 永 2009a「鉄器の生産と流通」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学第6巻，43-52頁。
- 野島 永 2009b『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣出版。
- 野島 永 2010「日本における古代鉄文化」『シンポジウム 東アジアの古代鉄文化』雄山閣，153-170頁。
- 野島 永編 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書。
- 野島 永・河野一隆 2001「玉と鉄—弥生時代玉作り技術と交易—」『古代文化』第53巻第4号，(財)古代学協会，37-51頁。
- 野島 永・河野一隆 2003「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター，7-16頁。
- 野田真弓・茶谷 満編 2005『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1，木製容器・かご，鳥取県埋蔵文化財センター調査報告8，鳥取県埋蔵文化財センター。
- 橋口達也 1974「初期鉄製品をめぐる2・3の問題」『考古学雑誌』第60巻第1号，1-17頁。
- 橋口達也 1983「ふたたび初期鉄製品をめぐる2・3の問題について」『日本製鉄史論集』たたら研究会，1-42頁。
- 橋口達也編 1984『石崎曲り田遺跡』II，今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集，福岡県教育委員会。
- 長谷川熊彦 1970「大陸製鉄技術のわが国古代への伝播」『日本製鉄史論』たたら研究会創立10周年記念論集，たたら研究会，97-139頁。
- 長谷川熊彦・和島誠一 1967「たたら製鉄鋳滓の研究」『資源科学研究所彙報』第68号，95-113頁。
- 原 秀三郎 1984「日本列島の未開と文明」『講座日本歴史』1，東京大学出版会，1-38頁。
- 春成秀爾 2003a「『日本遠古之文化』と渡部義通—山内清男」『考古学者はどう生きたか 考古学と社会』学生社，91-120頁。
- 春成秀爾 2003b「弥生早・前期の鉄器問題」『考古学研究』第50巻第3号，11-17頁。
- 春成秀爾 2006a「弥生時代の年代問題」『考古学はどう検証したか 考古学・人類学と社会』学生社，92-210頁。
- 春成秀爾 2006b「弥生時代と鉄器」『国立歴史民俗博物館研究報告』133，国立歴史民俗博物館，173-198頁。
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本 稔 2003「弥生時代の開始年代—<sup>14</sup>C年代の測定結果について—」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』日本考古学協会，65-68頁。
- 樋上 昇 2010『木製品から考える地域社会』雄山閣出版。
-

- 広瀬和雄 2002「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩—首長ネットワーク論の提唱—」『弥生文化博物館研究報告』1, 大阪府立弥生文化博物館, 101-113 頁。
- 藤尾慎一郎 2004a「土器型式を用いたウィグルマッチングの試み」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, 国立歴史民俗博物館, 157-185 頁。
- 藤尾慎一郎 2004b「弥生時代の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集, 国立歴史民俗博物館, 3-27 頁。
- 藤尾慎一郎 2005「縄文農耕と弥生製鉄」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越哲志先生退官記念事業会, 215-288 頁。
- 藤尾慎一郎 2011a「弥生鉄史観の検証と行方」『弥生研究のあゆみと行方』弥生時代の考古学 第9巻, 同成社, 117-132 頁。
- 藤尾慎一郎 2011b『〈新〉弥生時代 500年早かった水田稲作』歴史文化ライブラリー 329, 吉川弘文館。
- 藤尾慎一郎・今村峯雄 2006「弥生時代中期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 国立歴史民俗博物館, 199-229 頁。
- 藤田 等 1958「初期農耕の発展に関する二・三の問題」『私たちの考古学』19, 1-10 頁。
- 藤田 等 1974「鉄器の出現は何を物語っているか」『日本考古学の視点』上, 日本書籍, 246-251 頁。
- 藤田 等・川越哲志 1970「弥生時代鉄器出土地名表」『日本製鉄史論』たたら研究会, 176 頁。
- 藤田 等・田辺昭三 1960「弥生式時代鉄器鉄滓出土遺跡地名表」『たたら研究』第4号, 25-33 頁。
- 福永伸哉 2005「倭の国家形成過程とその理論的予察」『国家形成の比較研究』学生社, 39-60 頁。
- 北條芳隆 2011「国家形成論と弥生社会」『弥生研究のあゆみと行方』弥生時代の考古学, 第9巻, 同成社, 151-169 頁。
- 北條芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000『古墳時代像を見なおす 成立過程と社会変革』青木書店。
- 埋蔵文化財研究会事務局編 1984『埋蔵文化財研究会第16回研究会発表要旨関連資料集1・2(弥生時代から古墳時代初頭における鉄製品をめぐる)』埋蔵文化財研究会。
- 松井和幸 1982「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐる」『考古学雑誌』第68巻第2号, 169-210 頁。
- 松木武彦 1996「日本列島の国家形成」『国家の形成—人類学・考古学からのアプローチ』三一書房, 233-276 頁。
- 松木武彦 1998「考古学からみた「倭国乱」」『古代を考える 邪馬台国』吉川弘文館, 69-90 頁。
- 松木武彦 2007『列島創世記』日本の歴史1, 小学館。
- マルクス, K. 1939(岡崎次郎訳1959)『資本制生産に先行する諸形態』青木書店。
- 水村直人 2009「環日本海地域における交易拠点—鳥取県青谷上寺地遺跡の様相—」『考古学雑誌』第93巻, 30-49 頁。
- 水村直人編 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』6, 金属器, 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告39, 鳥取県埋蔵文化財センター。
- 溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷」『古墳時代像を見なおす 成立過程と社会変革』青木書店, 201-273 頁。
- 湊 秀雄・佐々木 稔 1968「タタラ製鉄鉄滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』第14号, 88-100 頁。
- ムーニエ, R. 1984(山内 昶訳)「流通形態」『経済人類学の現在』叢書ユニベルシタス141, 法政大学出版局, 151-189 頁。
- 村上英之助 1962「日本の古代鉄生産に関するノート」『たたら研究』第8号, 14-21 頁。
- 村上英之助 1964「弥生時代の鑄鉄品について」『たたら研究』第11号, 1-5 頁。
- 村上恭通 1992「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号, 319-344 頁。
- 村上恭通 1994a「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集, 龍田考古会, 71-86 頁。
- 村上恭通 1994b「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻第3号, 60-87 頁。
- 村上恭通 1995「星ヶ丘遺跡の鍛冶遺構について—近畿地方における鉄器供給問題—」『みずほ』第15号, 大和弥生文化の会, 86-91 頁。
- 村上恭通 1996「日本における鉄器普及の原初形態」『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』愛媛大学人文学会, 165-183 頁。
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店。
- 村上恭通 2000「鉄器生産・流通と社会変革」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』青木書店, 49-74 頁。
- 村上恭通 2002「四国における古墳出現以前の鉄器生産」『徳島の考古学—成果と展望—』徳島考古学論集刊行会, 337-351 頁。
- 村上恭通 2005「弥生時代鉄製工具における新器種とその分布」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越

- 
- 哲志先生退官記念事業会, 321-328頁。
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店。
- 森 浩一 1955「古墳時代の鉄鋌について」『古代学研究』21・22合併号, 1-20頁。
- 森 浩一・炭田友子 1974「考古学から見た鉄」『鉄』社会思想社, 37-41頁。
- 森本六爾 1933「日本に於ける農業起源」『ドルメン』第2巻第9号, 1-4頁。
- 森本六爾編 1934『日本原始農業新論』考古学評論第1巻第1号, 東京考古學會。
- モーリス, M. 1923-25(有地 亨訳1962)『贈与論』勁草書房。
- 山内清男 1932「日本遠古之文化」『ドルメン』第8号, 60-63頁。
- 和島誠一 1966「弥生時代社会の構造」『日本の考古学』III, 弥生時代, 河出書房新社, 2-30頁。
- 渡部義通 1931「日本原始共産社会の生産および生産力の発展」『思想』7-9月号(『日本原始共産制社会と国家の形成』校倉書房, 122-159頁)。
- 渡部義通・ヒアリング・グループ編 1974『思想と学問の自伝』河出書房新書。
- Bohannon, P., 1955. Some Principles of Exchange and Investment among Tiv. *American Anthropologist*, Vol. 57, no. 1. pp. 60-70.
- Brumfiel, E. M., and Earle, T. K., 1987. Specialization, Exchange, and Complex Societies: An Introduction. *Specialization, Exchange, and Complex Societies*, Cambridge University Press. pp. 1-9.
- Dupre, G., and Rey, P., 1973. Reflection on the Pertinence of a Theory of the History of Exchange. *Economy and Society*, Vol. 2, no. 2. pp. 131-163.
- Ekholm, K., 1972. *Power and Prestige: The Rise and Fall of Kongo Kingdom*. Skriv Service AB.
- Frankenstein, S., and Rowlands, M. J., 1978. The International Structure and Regional Context of Early Iron Age Society in South-Western Germany. *Bulletin of The Institute of Archaeology*, Vol. 15. pp. 73-112.
- Friedman, J., and Rowlands, M. J., 1978. Notes towards an Epidemic Model of the Evolution of 'Civilization'. *The Evolution of Social Systems*, University of Pittsburgh Press. pp. 201-276.
- Haselgrove, C., 1982. Wealth, Prestige and Power: The Dynamics of Late Iron Age Political Centralisation in South-east England. *Ranking, Resource and exchange*, ed., Renfrew, C., and Shennan, S., Cambridge University Press. pp. 79-88.
- Helms, M. W., 1991. Esoteric Knowledge, Geographical Distance, and the Elaboration of Leadership Status: Dynamics of Resource Control. *Profiles in Cultural Evolution*, Papers from a Conference in Honor of Elman R. Service, Anthropological Papers Museum of Anthropology, University of Michigan no. 85, The Regents of The University of Michigan, The Museum of Anthropology. pp. 333-350.
- Meillassoux, C., 1978. 'The Economy' in Agricultural Self-Sustaining Societies: A Preliminary Analysis. *Relations of Production: Marxist Approaches to Economic Anthropology*, Frank Cass. pp. 127-157.
- Schortman, E. M., and Urban, P. A., 2004. Modeling the Roles of Craft Production in Ancient Political Economies. *Journal of Archaeological Research*, Vol. 12, no. 2. pp. 185-215.
- Weiner, A., 1992. *Inalienable Possessions*, University of California Press.

(広島大学大学院文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年5月24日審査終了)

---

## Iron Culture in the Yayoi Period from the Viewpoint of the History of Related Studies: Giving a True Picture of the Role of Iron

NOJIMA Hisashi

In the 1930s, overcoming ethnicism while the government was tightening control on free speech, a new theory emerged. According to the theory, in the chalcolithic period, iron farming implements played a decisive role in agricultural production to create surplus resources leading to social stratification. After the World War II, the Yayoi period became recognized as a process where community leaders had promoted trade and labor division by using surplus working resources and enhanced their control over communities. It was considered certain that ground stone tools such as stone knives had disappeared in the Late Yayoi period, which was interpreted as a result of the proliferation of iron farming implements. However, archaeological excavations during the Japanese high economic growth period revealed that the proliferation had been limited to the northern Kyushu Island in the latter half of the Late Yayoi period. More and more researchers casted a doubt on the established theory that forged iron implements had appeared at the same time as starting rice cultivation. Their claim gradually undermined the deductive argument that the production and use of iron farming implements to increase agricultural production had created hierarchical societies. Around 2000, large scale excavations were conducted one after another along the coast of the Japan Sea, which revealed how iron tools had been used for the production of beads and luxury wooden containers. In other words, those archaeological investigations gave a clearer picture of community leaders who had put surplus labor into the production of elaborate craftworks to conduct long distance trade. Moreover, while the globalization of archaeology was progressing, the Western anthropology such as neo-evolutionism anthropology helped the development of the (early) state-formation theory as a new framework of historical recognition. Many researchers laid more stress on the distribution management of iron materials and implements as necessary goods than the agricultural production increased with the use of iron farm implements. On the other hand, some archaeologists voiced criticism from the viewpoints of inductive argument, which developed another assumption. Therefore, it became considered that imbalanced dependence between community leaders had been created by giving and receiving prestige goods. Furthermore, the distribution of iron materials and implements became considered to have had a close connection with the establishment of an economic base to activate the flow of goods. In summary, the above-mentioned history of studies can also be regarded as a process where the deductive argument of the role of iron culture in the formation

theory of a hierarchical society and an early state was verified by the iron culture theory based on the inductive argument.

Key words: Iron culture, Historical materialism, Neo-evolutionism anthropology, Prestige goods